

第一編 學校の部

緒言

明治初期の學校と外人

(一) 東京大學

東京大學はその淵源を遠く舊幕府時代に發せり。初め幕府の昌平黌、開成所、醫學所は、慶應四年(明治元年)幕府の瓦解と共に閉鎖せられしが、明治政府は兵馬倥傯の際にかゝはらず、教學の一日も忽にすべからざるを思ひ、右三機關を其の手に收め、明治元年六月先づ醫學所を復興し、尋いで昌平黌及び開成所を復興し、醫學校(西洋醫學を教ゆ)開成學校(普通及専門兩科を置き洋學を教ゆ)及び昌平學校(其儘)とそれぞれ改稱せしが、翌二年六月昌平黌を大學校(神典國典に依て國體を辨へ兼而漢籍を講明し實學實用を成すを要とせり)と改め、以て明治政府教育の中樞となし、開成學校及び醫學校を大學分局とし、尋いで十二月十四日前者を大學南校、後者を大學東校と稱せり。

明治三年二月に至り、大學規則及び中、小學規則の發布ありて、全國の學校制度の規定せらるゝや、大學本校に於いては教科を設け、大學南校は普通科に於いて講習(地理歴)、傳習(外國)、代數及び幾可(今日の中學四年程度)を學課とし、外國人教師は主として傳習及び數學を教へ、講習

醫學校
開成學校
昌平學校

大學南校
大學東校

大學校閉鎖
貢進生制度

海外留學生
規則發布

文部省

大學南校一時
閉鎖

等は邦人教師之れを擔任し。而して専門科にありては法科、文科、理科と別れ、理科は窮理學、植物學、動物學、化學、地質學、器械學、星學、三角法、圓錐法、測量法、微分積分法、等を教授する事となれり。然れども大學規則は要するに理想を掲げたるに止まり、當時の實狀を顧れば、専門科の制は活用せられず、南校に於いて専門科生徒の募集をなしたるは、二年後の五年正月にして、同規則の發布、は蓋し明治五年制定發布せられたる學制の先驅をなせるものと謂ふべし。而して間もなく三年五月に至り、大學職制に關する紛議爆發して大學校部に軋轢を起し、教官及び生徒の建白書の提出などありて、七月政府は一時大學校を閉鎖すると共に、外國人教師を増員し、貢進生制度を設け、各藩に命じて優秀なる子弟を選抜して中央に集め、歐米日新の學術を授け、以て國家有用の人材を養成せんとし、また十二月二十二日、海外留學生規則を發布して、これが實行に移りしが、四年廢藩置縣と共に、貢進生制度も亦廢止の運命に陥り、七月文部省の設置に伴ひ、「大學校廢候事」と令達あり、南校を一時閉鎖し、貢進生には總て退學を命じ、十月本校再開と共に貢進生中優秀なる者を選抜して入學を許可したり。而して大學南校及び大學東校は文部省所管となり、單に南校、東校と稱し各獨立の學校となれり。尋いで十一月には南校に於ける豫備校を廢止せられしが、間もなく進んで専門學校を設立せんとする議當局の間に勝ちを占め、英人フルベッキを法律講

フルベッキ
(教師ト法律
講師)

師、カテルリー及びギリフヒスを理學講義師として開校の運びとなれり。

大學南校普通
科外人教師、
雇傭

明治天皇御臨
幸

明治五年正月十二日、曩さに決定せる専門學校開設の爲め、布告を發して生徒募集をなせるに、入學試験の結果、合格者僅に一名(應募者二十名)に過ぎざりしを以て、専門學校開設は一時中止となり、教頭フルベッキを首め教官等も亦之を希望する處ありて、普通科卒業者の出づるを待ちて開校する事に變更し、三月文部省は本校を普通科のみとし生徒募集を布達せり。而して入學を許可せられたるもの四百四十名の多數に上り、學課は英、佛、獨の外國語の外、普通學を教へ、外國人教師は、英語に八名、即ちフルベッキ、ギリフヒス、ウイードルハウス、スコット、ウキルソン、ホワイマーク、メイヨル、ホール、佛語に五名、即ちマイヨ、フオンラ、ヌ、レビシエ、ビジョン、タルジャン、獨語に四名、即ちローゼンスタン、クニツピンク、シエシク、グレイフエンの合計十七名なり。茲に於いて南校の組織編成せられ、同月二十九日明治天皇南校臨幸の御沙汰下り、當日は文部卿等に謁を賜ひ、教頭フルベッキは特に拜謁を仰付られ、内外教官の進講等行はれ、フルベッキ及び外國人教師一同に各別に勅語を賜へり、フルベッキに賜へる勅語左の如し。

勅語

從來南校教頭トシテ盡力ノ段朕甚タ之ヲ嘉ミス朕更ニ汝ノ勉勵シテ生徒ヲシテ益々研學

懈タラサラシメン事ヲ望ム

學制頒布

明治五年八月三日文部省は新たに學制を頒布せり、之によれば全國を八大學區に分ち、每區に一大學校を置き、一大學區を三十二中學區に區分し、每中學區に一中學區を置き、一中學區を更に二百十小學區に分け、每小學區に一小學校を置く規定にして、外に商業學校、工業學校、通辨學校、農學校、諸民學校、師範學校を設くることとなせり。斯くの如くして學制は定められしが、經費は未だ決定に至らずして、即時には實施せられざりき。然れども、南校は學制に基き第一大學區第一番中學校と、東校は第一大學區醫學校と改稱せられたり。

第一大學區第一番中學校及
び醫學校

是れより先き、南校に於いては、普通科最高學級生の卒業期迫りしに、未だ大學建設の計畫成らず、生徒は卒業後の進退につきて狐疑し、會々司法省に於いて法律學生養成の事業を開始せるを見て、法律を修めんと欲する者は本校を退きて、之に入らんとするもの尠なからず。されば當局は大學開設の事を確定する外良策なき狀況となりしを以て、五月二十九日文部省に伺書を提出し、尋いで教頭シー・エス・フルベッキは高上學校ハイスクールのの設立計畫書を添へて建議する所ありしが、未だ其の運びに至らざる間に學制改革の事ありて、南校は第一番中學と改稱せられたり。

開成學校

明治六年大學設置計畫は進歩し、同年四月第一番中學校は開成學校と改稱せられ、専門學

明治天皇御臨幸

校(豫科三年本科二四年)となり、法學、理學、工業學、諸藝學(佛語)及鑛山學(獨語)等の五科を置き、茲に多年の懸案たりし専門學校の組織整ひ、同年十月九日開業式を舉行し、當日は 明治天皇の御臨幸の事ありて勅語を賜はれり。

勅語 (學校に賜ひしもの)

開成學校經營方ニ功ヲ竣フ朕今其開業ヲ親視シ茲ニ學術ノ進歩ヲ嘉ニス朕惟フニ専門ノ學校ハ器ヲ成シオヲ達スル處ナリ朕更ニ百般學術ノ益國內ニ擴張センコトヲ期ス汝等其レ此意ヲ體セヨ

勅語 (外國人雇教師に賜ひしもの)

開成學校經營方ニ功ヲ竣フ朕今群僚ヲ率ヒテ茲ニ開業ノ典ヲ舉ク惟フニ本校ノ學術今日ノ進歩ニ至ルヲ得ルハ職ト汝等諸教師ノ努力ニ因ル朕深ク之ヲ嘉ニス朕尙益學術ヲ更張センコトヲ期ス汝等亦能ク此意ヲ體セヨ

東京開成學校

ついで七年五月七日の達により、開成學校は東京開成學校と改稱せられ、法學校、化學校、工學校、諸藝學校、鑛山學校の五個の専門學校の合併せられたる官立大學校の編成となれり。明治八年海外留學生派遣の議あり、曩きに六年十一月官費留學生を全廢することとなり、一旦悉く之を引上げしめたりしが、教育の進歩發達を圖り、人材養成の途を講ずべしとして、

茲に其の議を容れ、第一回は八年七月(留學生十一名)、第二回は翌九年六月(留學生十名)、本校各科より選抜して歐米に留學せしめたり。而して其選に當りたる土木技術者は、平井晴次郎、原口要、古市公威(八年以上)、増田禮作、沖野忠雄(九年以上)の諸氏にして、後年吾邦鐵道及び内務土木事業に於ける權威者となり、斯界に貢獻する所甚だ大なるものありき。

明治十年四月五日、東京開成學校は東京醫學校と合併して東京大學と稱し、法、理、文の三學部と醫學部とに分れ、理學部の組織は舊東京開成學校の學科課程を踏襲せるも、新に數科の學科を開始し、理科教育の規模を擴大し、理學部工學科は最後の學年に於て之を土木、機械に分ち、各別に教授し、各學部には各々綜理を任命し、各事務を管掌したり。其後十四年六月十五日に至り職制の改正行はれ、大學事務の總理を置き、加藤弘之之れに任せられ大學を統轄し、各學部には部長を任命し部内の事務を執らしめたり。

第一回卒業式
明治十年十二月十九日本校は第一回卒業證書授與式を舉行し、理學部化學科を卒業せる高須祿郎、久原軀弦、宮崎道正等三名に卒業證書を授與せしが、尋いで翌十一年七月八日第二回卒業式を舉行し、法學科、理學部化學科、及び土木工學科卒業生十六名を出せり。其の内土木工學科卒業生は石黒五十二、仙石貢、三田善太郎の三氏なり。

この後明治十七年五月に至り理學部内に造船科を新設したり。蓋し海軍省の希望に基けるものなり。かくて翌十八年十二月理學部學科中より機械工學、土木工學、採鑛冶金、應用化學、造船の諸科を分割して、工藝學部(翌年帝國大學工)を設置せしが、同十九年三月帝國大學令公布せられ、従來工部省の所管たりし工部大學校は、東京大學と合併して帝國大學となり、各學部は大學と改稱せり。尋いで二十三年六月東京農林學校をも併合し、農科大學を増設し、茲に完全なる綜合大學の機構となり、爾後内容に幾多の變遷ありて今日に及べり。初め東京農林學校は、農學部、林學部、獻醫學部に分れ、各學科専門の學業を教授し、別に豫備科及び速成科の設けあり、本校は十九年七月同じく農商務省所轄たりし駒場農學校と東京山林學校とを廢し、其事業を繼承して設立せられたるものなり。而して、駒場農學校は明治七年四月内務省勸業寮内藤新宿出張所内に設けられたる農事修學場を以て創まり、十年駒場に移りて農學校と稱せしもの。又東京山林學校は十五年十一月の創立にして、其前身は十一年東京府豊島郡西ヶ原に設立せられたる樹木試験所なりしなり。

東京農林學校と農科大學となる

駒場農學校

東京山林學校

(二) 工部大學校

明治初年政府は工業の振興に就いて種々畫策する所ありしが、各省に於いて單に外國人を招聘し、若しくは邦人を洋行せしむるのみにては、到底充分に其の目的を達し得ずとなし、

四年四月工部大輔伊藤博文及び同少輔山尾庸三の建議を容れ、學校を建設して多數の人材を養成することとし、同年八月十四日工部省内に工學寮及び測量司を置き、曩きに民部省の設置せる修技寮とて勸工、燈臺、電信、測量等に關する技術練習所ありて、英人教師の教鞭をとれるものを工學寮に併合して工部學校を設立せり。

工學寮
アンデルソン
(造管掛英人)

工學寮は大學校、小學校よりなり、明治四年八月虎之門内延岡邸内に校舎の建築に着手し、十一月八日を以て工學校生徒の募集をなし、翌五年正月工部省内に造管掛を置き、傭英人アンデルソンを造家師とし、小學校及び生徒館を經始せしが(建築は六年十二月竣工)、別に翌二月十二日工部少輔山尾庸三は太政官正院に向ひ、工學校及び勸工寮の都檢(頭)及び教師の雇入につき伺を立て、直ちに認可せられしを以て、當時岩倉全權大使に同行せる全權副使工部大輔伊藤博文に教師の雇入を依頼せり。かくて翌三月二日工學校定則の稟定を見、工學校を大、小二校に分ち、小學二年間の課程に於いて四大試験を経て四級に登るを例とし、以て大學入學の資格を與へ、小學は同年七月開校の筈なりしが、外國人教師の來朝延引のため延期となれり。然るに曩きに伊藤博文に招聘方を依頼せる外國人教師は、倫敦に於いてジャーデン・マゼソンの斡旋によりヘンリー・ダイエル以下八名を決定し、六年六月に至り、來朝せしを以て、曩きに頒布せる工學校略則を廢し、假りに學科並諸規則を定め、私費生を官費生として、

工學校専門科

ダイエルの意見により専門科を分ちて土木、機械、造家、電信、化學、冶金、鑛山、の七科とし、綜合大學の組織をとり、生徒の在校修業は六ヶ年を以て卒業の期とし、卒業後七年間工部省に奉職するの義務あるものとなせり、而してダイヤーは延邊館に於いて太政大臣三條實美より餐餞の榮を得たり。ダイエルと共に來朝せる外國人教師は九名にして左の如し。

- | | | | |
|---------------|------|----|----------------|
| 工學校都檢兼器械學教師 | 工學博士 | 英人 | Henry Dyer |
| 工學校數學教師 | 數學博士 | 同 | D. H. Marshall |
| 工學校助教及工藝工場雛形師 | 同 | 同 | King |
| 工學校助教 | 同 | 同 | R. Clark |
| 同 | 同 | 同 | Y. Cauller |
| 工學校理學教師 | 理學博士 | 同 | W. E. Ayrton |
| 工學校化學教師 | 化學博士 | 同 | Edward Divers |
| 工學校英學教師 | 同 | 同 | W. Craigie |
| 工學校製圖教師 | 同 | 同 | E. F. Mondy |

かくて同六年十一月に至り、工部卿伊藤博文より開校式の布達あるしが、工學校に於いては大學校々舎設置の必要に迫りしを認め、工學校擴張建築の儀を太政大臣に稟申し、三ヶ年

の計畫を以て之を建築をなすこととなり、翌七年二月工學寮小學校々舎は既に落成せるを以て之れを充當し、工學寮開校を布達し、私費生を募集し、四月、五十三名の入學者あり、工學寮科を教授し、以て大學校に入るの階梯となせるを以て、更に大學校々舎建築の必要を生じ、其の建築計畫を建てて稟申し。なほ此の年數學及び測量教師としてアール・オーライ・マルジョンズを雇入れたるしが、翌八年二月建築學及び地質學教師の雇入れにつき伺出で次で認可せられ、而して十月十四日には令達により明治九年以降私費生もまた大學に入學を許さることとなれり。

工部大學校
明治十年一月十一日曩きに建築中の本校々舎も概ぼ竣工し、工學寮は工部大學校と改稱せられ、工部省工作局に隸屬し、大書記官大島圭介工作局長となりて之を監督することとなり、明治十一年本校は、生徒を入學せしむること既に六回にして諸教場及び中央講堂等を竣工し、規模殆んど成り校則も亦具備せるを以て四月十五日開校の式を舉行し。明治天皇の御臨幸を仰ぎ奉り、辱くも勅語を賜はれり。

勅語

曩ニ本校ヲ經營セシメ今工竣ルヲ奏ス朕親ヲ臨テ開業ノ典ヲ舉ク朕惟フニ百工ヲ勸ムルハ經世ノ要當今ノ急務ナリ自今此校ニ從學スル者罷勉シテ以テ利用厚生ノ源ヲ開

カン事ヲ望ム

此時工部卿伊藤博文、工作局長大島圭介、教頭ヘンリー・ダイエル各上奏文を上つり、式畢つて博文、圭介等先導し、皇族參議以下及び外國公使等扈從し、校内の諸教場を觀覽に供せり。

工部大學校
第一回卒業式
明治十二年十一月八日過る六年本校の始めて募集せる生徒二十三名が、六ヶ年の定期試験を完遂せるを以て第一回の卒業式を舉行し、第一等及第八名、第二等及第十四名、第三等修業一名の卒業生を出したり。此の内土木科卒業生は南清、石橋絢彦、杉山輯吉の三名なり。

海外留學生派
是れより先七月二十九日工部卿井上馨の稟議認可せられ、十一月二十五日卒業生徒中各部門に互り、計十一名を選抜して英國に留學を命ぜらる。土木科出身南清其の中にあり、翌十三年同氏等一同横濱を出帆して英國に航す、大方は十六年中に歸朝し本校教授其他要路に就職したり。

明治十五年四月二十日造船科増設せられ、又八月十九日本校を工部省直轄に改め、職制を更改して校長、幹事、教授、助教の職を置く、茲に於いて本校の體裁一變せり。この後本校卒業生の海外留學は經費の都合上中止となりしも、十八年四月時の工部卿佐々木高行は、歐米の學術進歩著しきに鑑み、再び留學生派遣の議を稟申し、認可を得て、卒業生中村貞吉

帝國大學

(當時助教授) 化學研究の爲め英國に留學を命ぜられたり。

明治十九年三月帝國大學令發布せられ、本校は東京大學と合併し、教師及び學生(當時在校生百五十三名此内土木科生徒十九名あり)は帝國大學に引繼がれたり。明治六年以來ここに十有三年、卒業式を重ねること七回、二百十七名の卒業生を出したりき。

(三) 札幌農學校

札幌農學校は、開拓使假學校及び札幌學校の後身にして、明治九年八月十四日札幌に開校式を擧げ、我國に於ける高等農事教育機關の嚆矢なり。本校の組織は米國マサチューセツ農科大學長ウキリアム・スミス・クラーク北海道開拓使に招聘せられて來朝し、同大學の組織に倣ひて教則を編成し、札幌農學校の内容に大改正を加へ面目を一新して開校し、明治初年以來開拓使の農事専門の學校設置の懸案を解決實現したるものにして、後年の東北帝國大學(明治四十年六月二十二日)及び北海道帝國大學(大正七年三月三十日)の前身をなすものなり。

北海道開拓事業は、早くよりその重要性を認められたり。即ち王政維新の始め、明治天皇はいたく蝦夷開發に宸念を勞させられ、種々之れが方策を御下問あり、明治二年六月中納言議定鍋島直正を蝦夷開拓總督に、尋いで同年八月改めて北海道開拓使を置き、東久世通禧

北海道開拓使

を開拓長官に任せらるゝや、孰れも優詔を垂れさせられ、北海道開拓が如何に國家の隆替に關係深さかを諭し給へり。翌三年五月、兵部大丞黒田清隆の開拓次官に任せらるゝや、清隆は専ら樺太の事を掌るの任務を帯びしと雖も、北海道の近さを棄て、樺太の遠きに及ぼすは、施政上緩急の順位を誤るものなりと論じ、力を北海道の開發に志し、意見九箇條を上り、其中に札幌に學校を設くべき事を開陳し、尋いで十一月洋行を命ぜられ、翌四年正月米國に渡航、滯在中彼地の拓殖状況を視察するや、其の潑刺たる生氣の漲るを看取し、大いに得る所あり。米國政府に請ひ當時現官たりし農務局長ホールネス・ケプロンを招聘することとなり、同年六月ケプロンは外に米人三名と共に農用機械、作物種子、動物等を携へて、清隆と共に來朝したり。この後ケプロンは開拓使顧問として、北海道の拓殖事業及び教育上に貢獻する所頗る多かりき。

ケプロン
(開拓使顧問)

ケプロン一行は八月吹上離宮に召され、拜謁の光榮に浴し、勅語を賜はりしが、九月十四日及び十月五日の二回に互り、東久世長官及び黒田次官は連署して北海道開拓の事を陳べ、札幌を根據として公署並に學校を建てんことを請ひ、上司の容るる所となり、尋いで五年正月二日ケプロンの獻策あり、開拓使も亦同月二十日假りに農工諸科の學校を東京に設け、後これを北海道に移さん事を稟申し、更らに同月二十三日醫學校及び病院を北海道に設

開拓使假學校

けん事を申請し、皆容認せられしを以て、ケプロンの意見を徴し、化學、機械、植物、畫學教師各一名、醫師二名を米國に求め、同年三月十四日拓殖上必要なる人物を養成する目的を以て、東京芝増上寺内に開拓使假學校を設立して、同月全國に向け生徒募集を通達し、四月十五日開校式を舉行したり。

開拓使假學校は普通科及専門科を置き、普通學修業後専門科に入らしめ、専門科は第一化學器械、第二礦物地質、第三建築測量、第四化學動植物及農學とし、其の一を選択せしめ、之れが教師として邦人の外米國人數名を聘することとし、五月米人トーマス・アンチセルを教頭兼化學地質教師とし、ゼームス・アール・ワッソンを英語及び數學教師に雇傭せり。而して生徒の定員は官、私費各五十名とし、官費生は十年間、私費生は五年間、北海道開拓事業に従事するの義務を負はしめたり。尋いで六月北海道舊土人男女二十七名を呼寄せ、芝山内清光院に住居し學習せしめしが、十月には開拓使に女學校を設け、將來卒業後男子部出身者に配偶し、相携へて北海の新殖民地に赴き、永住の居を構え、以て本道拓殖の功を全からしめんとせり。

六年三月十四日俄かに假學校を閉鎖したり。即ち姑く専門科を廢し、専ら普通學に力を注がんとせしものにして、組織を改め規則を正し、英語兼數學、地理、歴史の教師に米人

開拓使女學校

明治天皇皇太后
皇后の行幸
啓

アルバート・ジー・ベーツを、佛語兼算術、地理、歴史、物理の教師に佛人プロスベル、フリークを迎へ、又數學に小田昌邦、漢學に保田久道を擧げて四月再び開校し、翌五月には英照皇太后、昭憲皇后青山官園に行啓あらせられて、令旨を下し賜ひ、七月には 明治天皇亦青山官園に臨幸被仰出され、生徒の讀書、講義及び農具使用の様を嚮はせられ、超えて十二月五日には昭憲皇后假學校に行啓ありて、女生徒の課業を御覽せられ、優等生に書籍を賜ひ、本校よりは男女生徒及び舊土人合せて百三十人に對し行啓記念として菓子を分配したり。

明治七年舊土人生徒中男女十三名を歸郷せしむ、在京約二年とす。九月札幌學校官費生を廢止するに當り、優等者五名を選び本校に轉學せしむ。是れより先き、明治四年十月札幌に始めて學校を設け、資生館と稱し、専ら和、漢學を授けしが、五年十一月教則を改めて札幌學校と改稱し、英語、數學の二科を加へ、程度を高めたり。斯くの如く東京の假學校と年を同うして類似せる學校の札幌の地に起れるは、ケプロンの獻策と何等かの關係の存するものと察せられる。なほ同年十一月學校當局は黒田次官に専門部開設を稟請する所ありき。

札幌の人口漸く加はり、市街の體裁稍整ひ、本校移轉の期正に熟するや、明治八年三月、東京にありし假學校を同地に移すの議を決し、委員を札幌に派し、校舍修築に着手せしめ、七月竣成を告げたるを以て、同月假學校を札幌に移し、札幌學校と改め、學務局の所管となせ

假學校は札幌
學校となる

資生館

札幌學校

札幌農學校

り。而して八月體格強壯なる生徒三十四名を選び、調所廣丈及び語學教師米人ウキリアム・アール・コルウキン、其他職員と共に此の地に移り、九月七日開業式を舉行せり。コルウキンは先に同年七月ロツクウエルの後を繼いで札幌學校教師となり、翌九年札幌農學校開始迄其の職にありて、讀法の外、天文、地理、歴史、物理、作文、算術、書取、習字等凡て、九學科を擔當せり。この時に當り女學校も亦生徒三十六名、デニス、女教師等と共に札幌に移され、八月二十四日始業せるも、翌九年五月二日廢止せられ、女生徒は再び歸京せり。同校は創業以來僅かに四ヶ年に滿たず、所期の目的を充分達しえざりしと雖も、我邦女子教育發展に資する所大なるものありき。而して新たに札幌學校現はるるに及び、先きの札幌學校は名を兩龍學校と改め、英語及數學を廢し以前の形に復し、更らに第一小學校となり、其の後十四年六月創成學校と改稱せられ以て今日に及べり。

ウイリアム・
スミス・クラ
ーク
(教頭)

明治九年三月駐米吉田清成公使は豫ねて黒田長官より依頼せられたる、農學校教頭招聘に就いて其の適任者を撰擇中なりしが、漸やくマサチューセツ州アマスト、マサチューセツツ農科大學長の現職にある、ドクトル・フキロンフキエー、ドクトル・オブ・ローズ、ウキリアム・スミス・クラークの適材なるを知り、同氏と同月三日華府日本公使館に於いて會見し、招聘の契約を結べり。同氏は初め開拓使より二年間の勤務を所望せられしも、永く外國滯留

札幌農學校開
業式

を許さざる事情ありしを以て、一年間の賜暇を得て、自校出身者にして何れもバチューラー・オブ・サイエンスの稱號を有するウキリアム・ホキラー、ダヴキット・ビー・ペンハローの二人を伴ひ、明治九年五月二十日彼地を出發し同年七月三日無事着札し、茲にマサチューセツツ農科大學の組織に倣ひて、札幌農學校の教則を編成し、同校は八月十四日新装の學校として開業式を舉行し、拓殖上有用の材を養成するを以て目的とし、修業年限を四ヶ年とし、別に三ヶ年の豫備科を附設し普通學を授け、本科に入るの階梯たらしめたり。かくて同十年四月十六日教頭クラークは、我が政府との契約期限満ちて歸國の途に就けり。同氏の札幌にあること僅かに八ヶ月に過ぎざりしが、其の間に於いて幾多の事業と本校學生の受けたる靈的感化は眞に偉大なるものあり、札幌農學校の校風同氏により蔚然として起れり。

第一回卒業式

明治十三年七月十日、本校卒業生十三名の爲めに第一回學位授與式を行ひ、式典盛大を極めたり。これ實に同年三月及び六月駒場農學校を卒業せる者と相並んで、我が國に於ける最も先進の農學士なりとす。而して本年の卒業生は孰れも直ちに開拓使に任官し、農業、土木、教育事業に従事せり。なほ本校學科課程は第四年級第二期に於いて土木工學(道路、鐵道、水利工學)を課せるを以て、後年土木事業方面に於て其の名をなせるもの多し。ついで同十四年七月十日第二回卒業式を舉行し、新農學士十名を社會に送りしが、土木方面には廣井勇、藤田九三

郎の兩氏ありき。

明治天皇御臨幸

同年八月三十一日 明治天皇親しく本校及所屬校園に臨御、學生の農業現術を嚮はせられ、翌十五年三月本校は農商務省の所轄に移り、七月第三回卒業生十八名を出せるも、此より先、二月開拓使は廢せられ新設三縣に於いては、數多き學士を採用するの力なく、其の結果彼の約半數は他府縣に向つて職を求むの止むなきに至れり。

札幌農學校は、明治九年開拓使によりて、創設せられてより、同十五年農商務省の所轄に屬するまで、凡そ六年間を其組織時代と稱するを得べく、教官（本科）は其初期に於いては殆んど全く米國人に限られ、後邦人教官の數漸次増加せりと雖も、この時代の末期即ち十四年頃に至るも、なほ米國人は全教官の過半を占むるの有様にして、一、二學科を除く外、内外人教官皆英語を以て教授したり。かくて明治十六年二月本校は、農商務省内に設置せられたる北海道事業管理局の管轄となり、ついで十九年一月同局廢止と共に、北海道廳新たに設置せられ、其の所管となるや、存廢問題起り、危く廢止の運命に陥らんとせしが、本校當事者の努力に依り、翌年従來の農學科の外に、新たに工學科を置き、土木工學を教授し、本科を四ヶ年とし、卒業生に工學士の學位を與へ、二十四年初めて卒業生を出せり。然るに二十七年本校は、文部省の所管となり、工學科の廢止の議決し、三十年度の卒業生を最終として、工學

工學科設置及廢止

東北帝國大學農科大學

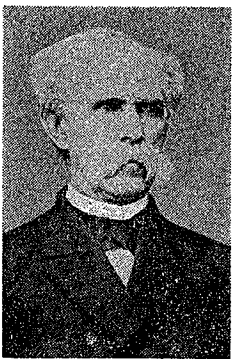
北海道帝國大學

科は全く廢止となりしが、本校は同時に低級の工學科を設け、更らに三十三年之れを高等專門學校程度に昇格せしめたり。其後四十年六月に至り東北帝國大學仙臺市に設けらるゝや、本校は札幌農學校の組織を改め、其の一分科となり、東北帝國大學農科大學と改稱せられ、更らに大正七年三月に至り、北海道帝國大學として獨立し以て今日に及びしなり。

外人略歴

1 ホーレス・ケプロン (米國人) Horace Capron

○北海道開拓使顧問、兼假學校教頭



ケプロンは、明治四年(一八七一)四月北海道開拓使顧問として招聘せられ、年俸金一萬弗を給せられ、ついで開拓使假學校の東京に創設せらるゝや、教師兼頭取となれり。彼が招聘の事情は、當時開拓使次官黒田清隆が、北海道拓殖の用務を帯び、明治四年正月米國に渡航し、滯留中

精しく彼の地に於ける拓殖状況を視察し、其の激刺たる生氣の漲るを看取し、是れを以て北海道開拓の範と爲さんとし、顧問招聘のことを米國政府に謀り、時の農務局長の要職にありし退役陸軍少將ケプロンを、年俸一萬弗の契約を以て招聘の承諾を得て、大いに喜び、同四年六月彼の外米人三名と相携へて歸朝したり、かくて八月畏くも 明治天皇は吹上瀧見離宮に於いて、ケプロン及び同伴の部下に拜謁を賜はり、氏に勅語を下し賜へり。

勅語 (ケプロンに賜はりしもの)

汝米利堅合衆國ニ在リテ農務局長トナリ學術ヲ研究シ勸農ノ事業ニ通曉セルヨシ朕之ヲ欽慕シ遠ク汝ヲ徵シテ我カ北海道開拓ノ長官次官ヲ輔ケ其事業ヲ司ラシメント欲ス汝能ク朕カ意ヲ體シ合議協力以テ開拓ノ成行ヲ奏セシメヨ是レ朕カ大ニ汝ニ望ム所ナリ

茲に於いてケプロンは謹みて、北海道の長官を輔佐し、開拓の爲めに盡力せんことを奉答し、翌九月同伴せるアンチセル及びワルフ・フィールド兩氏に調査要件を示して、北海道に出張せしめ、其の復命を考慮し、同年十一月北海道開拓事業に對し廣汎に互る一大意見書を提出せり。就中農業改良、農園及び學校の設置、並に札幌を首府とするに當り、札幌、室蘭、函館間の道路開鑿の急務なるを説き、また札幌首府改良修治の便法として、石狩川の水利、水力、石狩河畔の篠路、札幌間の車路開通、及び石狩川札幌間の運河開鑿等の交通事業に關する同氏の言議は、當時北海道開拓事業の根幹となりしものなり。尋いでケプロンは翌五年正月二日更らに黒田次官に建言して、「開拓使は科學的組織的にして且つ實用的なる農業を起さんが爲めには、全力を傾注せざるべからず、而して此の目的を達するには、東京及び札幌の官園に附帶して學校を設け、其の内に農業に重要なる總ての部門を教授するを以て、最も有

效にして且つ經濟的なる方策なりとす」と陳べたり。蓋し學校設立に就いては、是れより先き幕末の頃、地質學者にして鑛山技師たりし米人ウヰリヤム・ビー・ブレイキが、開拓事業の爲め、幕府に招聘せられたる折、同じく自然科學教育のため、函館または江戸に學校を開設すべき旨建言せし事ありしも、札幌と東京とを中心とする高等農事教育機關設立を建白せるは、ケプロンを以て嚆矢とす。斯くて開拓使は、彼の建言に基き、明治五年正月二十日、假りに農工諸科の學校を先づ東京に設け、後これを札幌に移さんことを稟請し、更らに同月二十三日醫學校及び病院を北海道に設けんことを請ひ、官皆之を許可せるを以て、更らにケプロンの意見を徵し、化學、機械、植物及び畫學の教師各一名、醫師二名を米國に求め、同年三月芝増上寺内に開拓使假學校の創設を見、次いで九月十九日には、北海道に於いて同校出身男子と共に開拓事業に従事せしむる目的を以て、假學校に女學校を併置したり。

ケプロンは、假學校の設立を見るや、同年四月東京を發して北海道に渡り、曩きにワルフ・ハド等をして従事せしめし函館、森間道路工事を見分し、其の進捗振りの好良なるを稱賛し、且つ之を激勵し、なほ室蘭よりも札幌に向ひ工事を起さしめ、ついで札幌に至り、北海道の氣候及び植物の状態の豫期以上に良好なるを見て、大いに喜び、種々有益なる報告を次官に提出せしが、翌六年五月には再び北海道に出張し、測量長ワッソン等をして、工事未了の島

札幌函館間官
道竣工

松より豊平橋に至る六里餘を竣工せしめて、明治六年六月二十八日札幌函館間官道五十七里十四町餘(内・森・室蘭間十一里二十六町は舟行)の全通を遂げしめたり。

ケプロンは當初より、開拓事業として鐵道敷設の必要を認め、殊に室蘭札幌間の鐵道に着眼せしが、明治六年ケプロンの推薦により開拓使に招聘せられたる鑛山師ライマンは、幌内炭山を調査して、其の有望なるを報告せり。依つてケプロンは之を黒田次官に致し、翌八月九日意見書を提出して、室蘭鐵道は私設に委して可なるべきも、幌内石炭搬出の爲めに、先づ幌内太迄鐵道を官設し、石狩河口沙灘を浚渫せば、幌内太に至る迄吃水十二尺の船航可能となり、石炭搬出に有效なりと説きしが、更らに歸京後、拓殖に關して從來建議せる要點十

鐵道創設建言

二ヶ條を擧げて、一大報告書を提出し、其の實施狀況を批評し、なほ自己の關與せざりし事業に就いて、其の當否を陳述せり。而して翌七年には第三次の北海道出張をなし、親ら東海岸を巡視し、同時にライマンには西海岸を視察せしめ、以て輸出の良港を求めしが、つひに適當なる箇所を選定し得ざりき。蓋し當時小樽は冬季五箇月間不淀泊港として閉鎖せられ居りしを以て、同港に想到せざりしなり。されど函館・札幌間官道の保修工事に對しては、緊要なる事項を申言し、マカダム式道路構築を推奨し、復豊平川水流を分ち、大水閘を築造し更らに二水閘を設備し、創成川を改修せしめ其の他諸般の視察を終へて歸京せり。

札幌農學校

ケプロンの建議によりて創立せられたる假學校は、翌六年専門部を廢止したるも、ついで七年十二月には、鑛學及び工學は追て詮議することとし、農業専門科を復活し、彼は其の學則及び外人教師招聘の議に參與し貢獻する所少なからず、ついで八年同校は札幌に移轉し、札幌學校と改稱せられ、九年八月には札幌農學校となり、吾が國農業専門教育上の基礎を形成したり。蓋しケプロンの宿志は遂げられたるものと謂ふべきなり。

ケプロンは任期滿了(明治八年四月三十日)に先立ち、從來提出せる報告書中、主要なるものを編纂して一冊となし、これを黒田開拓長官に提出し、なほ調査の要務を以て任期を八年六月三十日に延期して、殘務を整理せしが、歸國に際し 明治天皇は殊に彼の功績を思召され、謁見仰付られ左の勅語を賜はりたり。

勅語

朕曩に汝を開拓使ニ聘シ北海道開拓ニ從事セシム汝能ク長官ヲ輔佐シ黽勉職ヲ盡スヲ以テ事業皆其要ヲ得テ日月ニ進捗セリ朕深ク之ヲ嘉賞ス將來全道ノ繁殖ヲ致シ我が國家ノ洪益タランコト復疑ヲ容レサルナリ今期滿チ歸ラントス朕汝カ功勞ヲ表シ併セテ將來ノ幸福ヲ望ム

ケプロンは謹みて天恩の優渥なるを拜謝し、且つ曰く、「かゝる大事業は、草創の際往々困難ありと雖も、日月を経て之に打勝つの際に至らば、なほ一層聖慮に適ふ事あるべし」と、而して歸國後十年即ち一八八五年(明治十八年)二月二十二日病を以て米國に於て逝去せり、享年七十三。黒田清隆は深く其の死を悲み、未亡人に左記の弔詞を贈りて、其の遺功を表彰し、哀悼の意を表せり。

華盛頓駐劄我國公使ヲ經テ 令夫ノ訃ヲ聞ク 實ニ驚悵ニ勝ヘズ 嗚呼茲ニ一友ヲ失ヘリ 予ハ 別後歲更リ地隔ツト雖モ 悲嘆自ラ措ク能ハズ 況ヤ卿ノ哀悼ヲヤ 曩ニ令夫ノ北海道ニ在リシヤ 至情人ヲ動シ 勵精職ヲ盡シ 其功名永ク事業ト俱ニ存セリ 茲ニ一辭ヲ呈シ 聊カ哀情ヲ表ス

明治十八年四月

黒田清隆

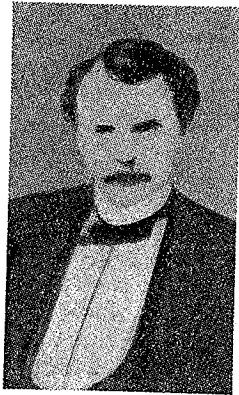
マルガレット・ケプロン 貴下

2 トーマス・アンチセル (米國人) Thomas Antisell

○開拓使學假校教頭(ケプロン氏部下)

アンチセルは、明治四年(一八七二)六月開拓使顧問ケプロンに隨ひて來朝し、ワルフキルドと共に開拓使傭となり、同じく同年八月二日 天皇陛下に拜謁仰付られ、ついで九月北

海道に出張して、同地に於ける各般の狀勢を視察して、有益なる事項を復命し、特に同地方開拓に當り、札幌を首府となすに於いては、東海岸の室蘭に聯絡を取り、室蘭と函館とを聯絡する道路を開鑿し、以て海路内地との交通を便ならしむるの急を説きしが、彼は更に札幌の地勢を以て、東海岸に長さ一條の道路を有する窮鼠の如しと比喩し、その聯絡路を開くにあらざれば、全く首府の價値なしと斷じ、室蘭を重視したり、これ當時小樽港は、十月以降四月まで、航海中絶の狀態にありしによると雖も、是等の主張は、顧問ケプロンを動かし、尋で開拓使の容るる處となり、札幌、函館間本道開鑿工事の急施決定をなさしめたり。



翌五年正月開拓使假學校の創設せらるるや、五月彼は同校教頭兼化學地質學教師に任ぜられたり。當時黒田開拓次官と彼との間に結ばれたる約條の一節に、「日本政府に於いてアンチセルを雇ふは、地質工作鑛山舍蜜（化學）の長、或は學校の教頭教師の爲めにして、雇中は日本官員並にゼネラル・ケプロンの差圖を受け、日本政府の命令を遵奉す可き事」と記されたりき。

本校は普通科と専門科に別れ、専門科に於いては物理學、器械學、鑛山、地質、建築、測量、化學、植物、動物、農學及び晝法を教授し、専門として第一化學、器械、第二鑛物、地質、第三建築、測量、第四化學、動植物及び農學の四分科に分れ、其一を撰擇せしむる學制なりし。翌六年三月俄かに假學校を閉鎖し、組織を改めて、翌七年四月十二日新たに假學校々則を制定し、専門科は廢止せられ、彼は同年（一八七四）三月その職を退きたり。

3 チェームスアール・ワッソン (米國人) James R. Wasson

○開拓使假學校教師（札幌本道開鑿工事擔當、後開成學校土木教師）

ワッソンは、明治五年（一八七二）二月二十二日、三箇年の期限を以て、年俸初年米金四千弗、二年目五千弗、三年目六千弗、外に滿期の際一千弗支給の契約を以て招聘せられ、開拓使假學校英語及び學術教師として東京に在り、ついで北海道札幌・函館間官道開鑿工事實施せらるゝに當り、曩きに來朝せる米人ワルフィールド陸地測量兼道路築造長となり、同氏は測量長を命ぜられたり。同工事は、五年三月渡島國龜田村を起點として工を起し、更らに室蘭を起點として札幌に向ひ、八月には札幌錢函間道路開鑿をも起工し、五年暮には既に工事の大部分を竣功せるも、時既に寒氣酷烈となり工事中止の止むなきに至り、ついで翌年四月新たに工を起し、ワッソン測量長となり、六等出仕荒井郁之助外六名と實測に着手し、速成を期し、六月九日輪厚より豊平橋まで三里二十五町餘、ついで同月二十八日、馬松より豊平橋

迄六里餘の新道を竣功したり、茲に於いて札幌函館間(森村室蘭間
汽船連絡)の道路は完成し、之れを札幌本道と稱せり。

ワスソンは、札幌本道工事終了するや、米人デーを助手として、三角法を以て全道の測量に従事し、同年七月勇掛川鶴川間の平原に標石を建て、基線を定め、三角測量の第一着手となし、九月石狩川を溯上して、茨戸篠路豊平千歳の四川及び支流の測量を四班に分ち、自ら二班を受持ち、石狩川沿岸に基線標柱を建て、大三角測量線と合致すべき點を示せり。ワスソンは、當時石狩川河口に築港の問題ありて、顧問役ケブロンより、札幌石狩河口間

鐵道布設の調査を委託せられ、左記の報文を提出せり。

千八百七十三年(明治六年)十二月十六日 日本 東京
呈

北海道開拓使教師頭兼顧問

ゼネラル・ホールレン・ケブロン 貴下

札幌より石狩河畔バート河口、又は其近傍の場所迄、良好なるT字形鐵の輪車路鐵道のことを開くに、一マイルに付、凡そ價何程相掛可申哉の旨、御伺合に付、左に申上候、素より如此き車路の價は、其開くべき道筋を、實際に測量不致候故、凡そ積りに候へども、其地方の模様は、了知罷在候間、其金高可也精密に申上候事出来候。

入用なる小橋梁及びタイス(枕の木こと)に用ゆる材の如きは、其開くべき道筋に於て得られ可申、又車道を築實する砂石の如きも許多有之、其上地勢平坦に候間、逆路の勾配を作る事甚だ容易に候、故に其費は鐵の價を除くの外、如此き道路に於ては少許に可有之候。右の如くに御座候間、其費凡そ左の如くに可有之哉と被存候。

鐵條。一ヤルドに付五十五磅として、一マイルに付八十七噸、一噸に付九十弗、運賃迄七千八百三十弗。

チエル(鐵條を固持する金)。スパイク(長釘)八百弗。

タイス。四百九十五弗

道路の地面を均し、勾配をつけ、水排けを造り、砂土を以て道を築造し、陰渠を造る等の費は、節儉せば、一マイルに付一千五百弗として、總高一マイルに付一萬二千弗内に可有之、左すれば、金額一萬一千三十弗に有之候、道程は長くと七マイルに過ぎ不申候間、全道八萬五千弗にて出来可申、如此き道路は貿易盛なるに至ては、何時にても汽車に用ゆるを得申候、只汽車を購ふ費のみに候。

右は素より凡そ積りにて、道を造る仕方等にて大に異り候へども、來春の策を建るに於て、御手引とも相成可哉と奉存候、拜具謹言

開拓使 測量長 ゼームス・アール・ワスソン

而してワスソンは、北海道全道の測量の業未だ終らざる明治八年三月、任期満ち、助手デーを後任に推して解任せられ、ついで陸軍省雇となり、間もなく轉じて、同年十月一日より

三ヶ年の期限を以て、東京開成學校土木教師に招備せられ、月俸日本貨幣三百五十圓を支給せられ、明治十年(一八七七)一月二十二日、同校の東京醫學校と合併し東京大學と改稱の議決せらるゝに先立ち、願により職を免ぜられたり。而して同年四月十一日、曾て陸軍省雇となり、准少佐たりし時の勳功もありて、勳四等に叙せられ、旭日小綬章拜授の光榮に浴し、同月二十二日歸國せり。

4 エドウィン・ダン (米國人) Edwin Dun

○札幌農學校牧畜教師(日清役當時駐日米國公使)

ダンは開拓使に於いて彼の父及び伯父より牛、羊を購入したる際、明治六年(一八七三)五月農牧管掌の爲め雇聘せられ、牛二十頭を牽きて、同年七月東京に着し、東京所在の開拓使官園に在勤し、また假學校に於いて講義及び現業により、生徒に農耕牧畜の法を授けしが、ついで八年夏期北海道に出張して、七重官園に於いて官吏及び生徒に教授し、且つ馬の去勢法を傳授したり。かくて翌九年札幌在勤を命ぜられて同地に移住し、近郊に牧羊場を設け、眞駒内に牧羊場を開き、漁村に假馬場を撰定したりしが、牧羊場は翌年春に整頓し、眞駒内家畜房は翌十年秋に至りて竣成したり。彼はまた外國産種馬四頭の購入に盡力し、新冠牧場を視察せしが是歲彼の設計によりて、札幌育種場内に橢圓形馬場(距離四百四十間)を

築造落成せり、是れ札幌競馬場の濫觴なり。また彼は未開地の開墾をなして諸種の穀類牧草の播種をなせしが十一年には七重其の他の牧場を巡回して飼料耕作地を撰定せり、而して同年札幌に開催せられたる第一次農業假博覽會は、當時當局官吏はかゝる經驗に乏しかりしを以て、殆んど彼の監督指導に俟ちたりといふ。

ダンはかくの如く、牧畜方面に盡力すると共に、土地改良事業たる江別の泥炭濕地改良に當りて、瓦筒(土管)埋設作業を施して排水に成功し、中部北海道の泥炭地改良事業に先鞭を着け、また瓦管排水は札幌農學校園内の低濕地改良の爲めアムピールクスに依つて企てられ、材料たる粘土は之を附近に求め、必要なる器械の一部を米國より輸入し、附屬品は米國式を模して札幌にて製造し、十二年設備を整へ、翌年より多量の土管を製造し、之を埋設して改良の目的を達成したり。彼は「北海道に於いて土管を製造し、且つ使用するは甚だ重要なることと信ず、夫れ現今農耕に適せざる數千町歩の土地も、之れが爲めに化して能く稠密の人口を支ふるに足るべき豊饒の田園と爲すを得べきや必せり」と説き、我が國に於ける土管排水事業の創始をなしたりき。

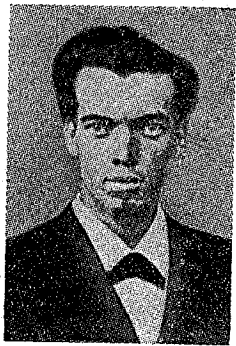
ダンの始めて雇聘せらるゝや、期間を一箇年と定め、月俸金貨百二十五圓なりしが、爾後數回雇傭期間を延長し、月俸も亦逐次増加し銀二百五十圓となりたり、十六年(一八八三)

濕地排水用土管製造の嚆矢

一月任期満ちて歸國せしが、明治二十七、八年日清戦役の當時は、駐日米國公使として東京に在勤し、外交關係に於いて我國の爲めに斡旋する所大なるものあり、後更に大正五年の交、三菱會社に招聘せられて、暫らく吾國に在住したり。

5 ウィリアム・ホイラー (米國人) William Wheeler

○札幌農學校土木學教師、(後、教頭心得)



ホイラーは米國マサチューセッツ州農學校を卒業し、明治九年、札幌農學校教頭ウィリアム・エス・クラークの推薦により、開拓使に聘用せられ、同年七月クラークと共に札幌に來り、農學校の數學及び土木學の教師として、年俸金貨三千圓の支給をうけたり。彼は熱心なる基督敎信者

にして、品行方正、且つ威容あり、翌十年四月クラークの満期歸國するや、其の後を承けて教頭心得となり、温厚能く校務を處理し、同時に一箇月金貨五十圓の増給を受けたり、其の後十二年三月開拓使の土木工事を兼務し、八月任期を繼ぎ一箇年貿易銀四千八百圓の俸給を支給せられたり。

ホイラーは、着任後間もなく、農學校に於いて氣象觀測を始めしが、なほ北海道北東海

岸に測候所を設置せんことを當局に勸告し、尋いで十一月末より補助手譯官等を伴ひ、嚴冬の候にも拘らず舊運河、琴似川、篠路川、新運河、茨戸川及び石狩川等の測量をなし、翌十年一月には札幌、小樽間測量に従事し、また四周の狀況を視察し、札幌茨戸川間水間運河線、札幌小樽間大道、札幌小樽間鐵路線等の測量圖を作製し、これが工事計畫及び豫算を作り、以上三策の交通價值を検討し、別に室蘭港の將來と札幌室蘭間鐵路布設等に關しても研究する所あり、廣汎且つ精細なる事項に互り、同年二月二十日「從札幌至海岸運送線路報文」を作製して、これを開拓使に提出せり、尋いで六月黒松内山道を踏査し、之れが改修計畫を樹て、間もなく工を起して七里餘の險坂を幅二間の坦路に改修(經費三萬六千圓)せしめたり。

ホイラーは曩年米入ホルトの設計に成りし、洋式橋梁豊平橋の、十年春期の出水により破壊せるを以て、その重修計畫を委嘱せられしが、破壊の原因は、一、川幅を廣くし激湍の中央に橋臺を設けたること、二、橋臺廣さを以て衝激強くその基礎たる河底の砂礫を流蕩すること、三、架橋上流廣さを爲出水の際流域を變じ、斜に橋臺に衝突すること、四、橋臺の深さ十分ならざるこの四點にあることを指摘し、且つ元來豊平川は、札幌の下半里許より石狩川落口迄は、洪水の時と雖も、百乃至百五十尺の幅なれば、二百八英尺の一橋(前橋梁は二百八英尺及百六英尺の二橋梁)にして十分なり。されば兩岸に堤防を築き、流水を疏通し、方向を定むれば、激衝を防ぐに

足るべしと説けり。この彼の設計は採用せられ、短橋を撤廢し、彼の計畫圖によりて改修工事を施し、翌十一年十月完成したり。かくて明治四年以來新架及び修補殆んど虚歲なかりし本橋梁は爾來漸く其の憂を絶つに至り。彼はまた同年十一月別に石狩川水利測量手續書を作製して、これを開拓使に提出せり。

ホイーラーは農學校教職の傍ら幾多の土木事業に干與せしが、十二年三月より開拓使土木工事を兼務し、斯界に貢獻する處大なるものありき。かくてこの年十二月任期満ちて歸國し、其の後マサチュセッツ州農學校に就職し、反射器の發明をなし名聲頗る揚りしといふ。

6 セシル・エッチ・ピーボデー (米國人) Cecil H. Peabody

○札幌農學校數學及土木教師



ピーボデーは米國に生れ、父は數學家及び教育家として令名ありし人なり、ピーボデーは長してマサチュセッツ州立工科大学を卒業し、同州立農學校に教鞭を執りしが、明治十一年(一八七八)開拓使に聘雇せられて來朝し、ホイーラーに代りて札幌農學校の數學及土木工學教師となり、月俸貿易銀二百五十圓を受く。當時同校にて始めて設けたる四年級土木工學科に於いて、物

體の強弱、屋脊及び橋梁材の測算、基礎及び道路の建造等の初歩を簡略に教授し、十四年(一八八一)七月満期となりて歸國したり。其の後米國イリノイ大學及び母校工科大学の教職にありしが、大正八年六月我が國博士會の推薦により工學博士の學位を授與せられたり。

7 エーダブリュー・アンタンク (米國人) A. W. Uthank

○開成學校教師

アンタンクは、明治七年(一八七四)三月より同年九月に至る六個月の期限を以て、開成學校の畫學、數學、及び測量學教師に招備せられ、月俸日本金貨二百五十圓を給せられたり、同校は同年五月東京開成學校と改稱せられしが、彼は引續きてこれに教鞭を執れり、彼は任期甚だ短かかりしが、吾が邦土木學創始の際に於ける功勞者の一人なりき。

8 ウインフィールド・エス・チャプリン (米國人) Winfield S. Chaplin

○東京開成學校土木教師

チャプリンは東京開成學校土木教師ワスソンの後任として、明治十年(一八七七)二月十三日、向ふ三箇年の期限を以て招聘せられ、月俸日本貨幣三百七十圓の俸給を受け、満期となるや、なほ二箇年繼續せられたり、而して彼の着任後間もなく同年四月、東京開成學校

は東京醫學校と合併し東京大學となり、彼は其の理學部に於いて土木工學を擔當せり。彼は吾が邦に於ける微分積分學の紹介者にして、教育上其の功績没すべからざるものありき、かくて在職五個年、明治十五年（一八八二）七月十一日滿期歸國せり。解任に際し大學は在職中の功勞に報いるに大和錦一卷、天鵝絨一卷、紅梅織卓氈一卷を贈りしが、其の後十八年二月には勳四等旭日章拜授の光榮に浴し、大正四年には我が國博士會の推薦により工學博士の學位を受領したり。

チャプリンは一八四七年八月二十二日、北米合衆國メイン州グレイバーアヌに生れ、父をダニエル・チャプリンといへり。一八七〇年合衆國ミリタリーアカデミーを卒業し、一八七〇年より一八七二年まで陸軍少尉として合衆國第五砲兵隊にあり、一八七二年より一八七三年迄鐵道技師として勤務せしが、同年メイン・ステーツ・カレッジ教授に任ぜられ、機械工學を擔任し、ついで一八七七年^{（明治十年）}日本政府の招聘によりて來朝し、在留五個年に及びしが、歸米後一八八三年より三個年ユニオン・カレッジ教授として數學及び物理學を擔任し、一八八六年より五個年間ハアバードのローレンス・サイエンチフィック・スクールの學長及び教授として工學を擔任したり。其の後ワシントン・ユニヴァーシティーの大學總長に就任し、一九〇七年退職したり。彼は在世中幾多の學會及び團體に關與し、斯界に功績を残し、一九

一八年三月十一日テキサス州サン・アンドニオに於て七十一歳を以て逝去せり。

9 チェームス・アルフレッド・ユーキング (英國人) James Alfred Ewing

○東京大學理學部教師（地震學研究者）

ユーキングは英國蘇格蘭に生れたり。明治十一年（一八七八）九月二十九日、三年間の期限を以て招聘せられて、東京大學理學部機械工學教師となり、月俸日本金貨三百五十圓を支給せられしが、別に來航に際し、支度料三百五十圓を受け、毎月の宿料は日本紙幣金三十圓を與へられたり。明治十四年第一期の期滿つるを、二個年の傭繼ぎとなり、其の間月俸銀貨三百七十圓に増額せられしが、滿期に先立ち十六年（一八八三）六月解任歸國したり。歸國に際し六月七日特に拜謁の光榮に浴せしが、明治三十四年四月、在任中の功勞により勳三等に叙せられ瑞寶章を贈られ、大正四年にはわが國博士會の推薦により、工學博士の學位を受領せり。

ユーキングは吾が國にあること五星霜、その間學生の教導に竭くし、傍ら心を學術の研究に潜め、吾が邦に於いて始めて地平振子靜止點力學上の原理を應用して、極めて價值ある地震計を創造したり。當時地震計の名稱を冒せるもの無きにあらずしも、其の設計は概ね粗笨にして、學理に適合せず、未だ以て地震震動の真相を窺ふに足るものなかりき。然るに

彼は此の缺點を補ひ地震計論を著し、之を大學刊行の理學會粹に掲載して其の作用を論ぜしが、尋いで一つ橋外理學部構内に觀測所を設けて、實測的地震學の端緒を開けり。爾來吾が國各地の測候所は、一として之れが觀測に彼が考案せる地震計を備へざるものなく、本邦斯學の今日の振興を致せる因を爲せり。又彼は在任中磁力學上の研究をなし、後ち之を倫敦府王立學會に提出して、學者間に大なる賞讃を博し、擧げられて同會々員となれり。抑々我が邦理科大學に於ける磁力學上の研究が、今や世界に噴々たる名聲を得たる所以のものは、蓋し彼が當初に於ける啓發薰陶の功績によるもの多きにありと謂ふも過言にあらざるべし。

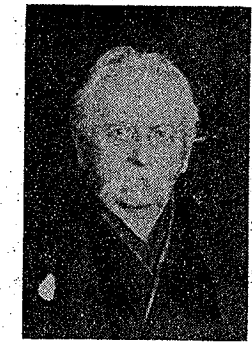
ユーキングは一八五五年(安政二年)三月二十七日英國ダンデー市に生れ、英國エデンボルフ大學出身にして學位を有し、大學卒業後一八七八年まで機械工業に従事し、同年東京大學の招聘によりて來朝し、在職すること五年、一八八三年歸國せしが、この後一八九〇年までダンデー、ユニバーシティー、カレッジ教授として工學を擔任し、其の後英國二大學の一人ケンブリッジ大學教授として、機械工學及び應用力學を擔當し、ついで一九〇三年より一九一六年まで海軍教育部長の職に就き、更にエデンボルフ大學々長兼副總理に就任し、幾多の要職を兼ね、祖國の學術界に貢獻する所頗る大なるものありしが、一九三五年(昭和十年)一

月七日逝去したり。

10 ジョン・アレキサンダー・ロウ・ワデル (加奈陀人)

John Alexander Low Waddell

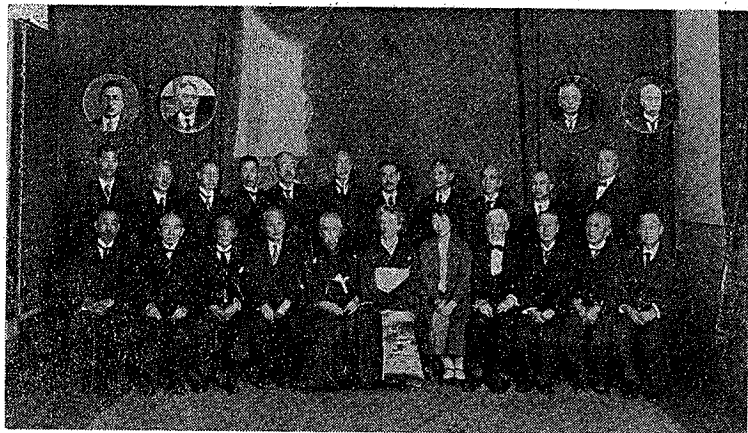
○東京大學教師(橋梁學擔當)



ワデルは東京大學土木科教師、チャプリン歸國について、明治十五年(一八八二)八月二日より向ふ三個年を期限とし、東京大學理學部土木工學科教師となり、授業時數一日四時間以内、月俸銀貨三百七十圓、旅費來歸共各銀貨四百五十圓、宿料日本紙幣月三十圓支給の契約を以て招聘せられしが、期限満了後も尙一個年を繼續して、同十九年(一八八六)四月十二日滿期解任

となりて歸國したり。彼の本邦在任は僅かに四個年に過ぎざりしも、元來教育に興味を有せる彼は熱意を以て學生を薰陶し、傍ら専門學の研究に勉め、同十六年に「ゼ・デザイニン・グ・オブ・オーヂナリー・アイアン・バイウエイ・ブリッジ」なる著書を刊行せり。當時構造學に關する完全なる著書は、未だ甚だ少なかりしを以て本書は數年間に互りて、米國に於ても標準教科書として採用せられしが、彼はまた同十八年東北本線荒川橋梁及び高崎線烏川橋

英米鐵製橋梁
優劣論



- 近藤仙太郎
- 曾根遠藏 高橋清輔 岡 胤信
- 山口準之助 江橋貞二 野村龍太郎
- 笠野英三 田中館愛橘
- 樺島正義 高良富子
- 大井上前雄 ワデル夫人
- 青木元五郎 ワデル博士
- 廣田理太郎 二見鏡三郎
- 原田貞介 奥平洋三
- 辻 太郎 森 忠藏
- 上山善司 中倉專一郎 谷井綱三郎
- 西村正一 和田義睦

梁の竣成を告げたる際「日本鐵道橋梁論」なる一書を著し、ついでジャパン・メル紙上(横濱にて發刊の英字新聞)に於て、英米鐵製橋梁の優劣を論じ、當時吾が國の鐵道橋梁の設計に當れる英人技師一派に刺戟を與へて、其の反駁論を惹起せしめ、數個月に亙り兩者の論駁は同紙上を賑やかし、

本邦鐵道橋梁設計の變革

遂には感情的論争となりて止みたりしが、その吾が邦鐵道橋梁設計に刺戟を與へたるは、頗

る大なるものあり。その後明治二十七、八年日清戰役當時を境として、本邦鐵道橋梁は悉く英國式を捨て、米國式を採用することゝなれり。

ワデルは解任に當り、特に謁見を賜はりしが、別に帝國大學は羽二重綴子二卷、陶器製花瓶一對を贈りて其の勞を犒ひ、その後二十一年五月勳四等旭日章を賜はり、後大正四年吾邦博士會の推薦により、工學博士の學位を受領したり。かくて同十年彼は支那に出張せし歸途來朝せしが、この時に當り、彼が歸國後もなほ吾邦技術界に盡力したる功勞を以て、勳二等瑞寶章を拜授せしが、尋いで昭和五年(一九三〇)世界工業大會が東京に開催せらるゝに當り、彼は再び來朝して朝野の厚き歡迎と好遇とを受けたり。

ワデルの生涯は奮闘の歴史ともいふべく、彼は若年より多難に遭遇し、長じては南船北馬努力につぐに努力を以てし、遂に技術界に重きをなすに至りしものなり。即ち彼は一八五四年(安政元年)二月十六日加奈陀オンタリオ市ポートホッフに生れ、父はロバート・ニードハム・ワデルといひ、一八三一年(天保二年)愛蘭より加奈陀に移住せしが、母は合衆國に生れたり。彼は九歳に達する迄家庭に於て母の教育を受け、後二年同地の普通學校に通學し、一九六五年(慶應元年)父の州長官に任ぜらるゝや、隨ひてゴリブルク市に移住せり。當時米國等に於ける専門工學の教育制度は、未だ完備の域に達せず、従つて彼の土木技術者と

なれる迄の閲歴も、亦多難多様なりき。左の履歴は當時の狀況を推知するに足るものあり。ワデルは中等學校を終了するや、ポートホープ所在のトリニチイ・カレヂスクールに一年餘を學び、十六歳の時、過度の勉強はその健康を害し、之れが療養のため、紐育茶商の快走船の客となりて支那に渡航し、香港及び上海間に約一年を過し、漸く健康を恢復して歸國するや、トロントに於ける實業大學に學び、間もなく一九七一年（明治四）秋レンセラアの工藝學校に轉學し、同校を卒業せるも、其の教育に嫌厭たるものありて、將來土木技師として立身せんことを決意し、オッタワ市に於ける航海局に製圖手として就職し、數ヶ月を浮標及び燈臺等の設計に従ひたる後、加奈陀移民局内に新設せられたる、加奈陀太平洋鐵道事務所に轉じ、照尺手に採用せられ、一年有半をポートサイバン附近の測量及び工事に従事し、其の間非常なる苦難を嘗めたるも、また大なる經驗を得たり。然るに前途に昇進の見込薄く、且つ俸給も少なかりしを以て、辭職して道路建設の請負工事者と契約し、四個月餘を叢林の中に働さしが、之亦意に満たず快々として家郷に歸り、晩學の兄の勉學を補助して、鬱々として日を送り、高名心に驅られし青年技術者は、無雙の憤懣の裡に約八個月を過したり、ついで彼は意を決してミゾリー河架橋工事場の下役となりしに、非常なる暑氣とマラリヤ病のために健康を害し、僅かに一個月餘にしてまた職を辭し、間もなくウエストバアヂニアに於

ける石炭鑛山會社の技師となり、地上地下の測量及び堅坑その他建造物の構築に従事せり。然るに一八七八年母校たるレンセラア工藝學校に於ける測量學及び圖形幾何學の助教授に推薦せられたり。茲に彼の登龍門は開かれりしなり、即ち彼は石炭鑛山會社を辭して同校に入り、六個年間科學の研究に専心する機會を得て、理論及び工學、力學の助教授の好地位に推舉せられ、多くの學會に關係し、廣く諸大家と交り、就中當時コロンビヤ大學教授にしてバナマ運河協會の會員たりしウイリアム・エッチ・バー博士の知遇を受けたるは、彼の將來に益する處頗る大なるものありき。即ち一八八一年（明治十四）一月カウンスシルブルグに本社を有するレイモンド及びカンベル兩氏經營の橋梁會社の技師長に拔擢せられ、翌年春マックギル大學は、彼にバチエラー・オブ・アプライト・インヂニアアの稱號を、尋いで六月にはマスター・オブ・インヂニアアの學位を授與したり。

かくて翌一八八二年（明治十五）彼は吾が邦の招聘を受け、六月アダ・エベレット嬢と結婚し、夫妻相携へて來朝し、大學理學部の土木教師に任ぜられたり。彼が吾が邦に招聘せらるゝに至りしは、早くより工學に關する論文を發表し、主としてピーエタ科學協會（現今のレソサエチアニア）會誌に掲載して、工學界の注目する處となりしに因るものなるが、彼はこの後、執筆を怠らざりき、即ち吾國在任中に於いても「デザイン・オブ・オーヂナリー・ハイウ

エーブリヂ」の著述を米國に於て發刊し、ついで「日本鐵道橋梁論」を發表して、當時日本鐵道橋梁の設計に當れる英國技師との間に盛なる論争を起したるは、前記の如し。當時米國に於けるメルボルン大學教授ダブリュ・シー・ケルノット博士等も、技術方面に於いて彼の所説を支持せしが、又彼は更に十八年八月五日論文を發表して、「吾が論文を攻撃せる記者の一人たりとも、技術的眞價に論説を導ける者なく、橋梁構造に關する古き英國式の根本的缺陷を世界に暴露したるものなり」といへり。而して當時は鋼製作の進歩著しく、橋梁用材は鐵より鋼に變改せられつゝありし時代なりしが、彼の前記著書中の理論及び施工法は權威を失はずして、一時廣く教科書として流布せられたるも、數年ならずして彼は絶版を要求したりき。

ワデルは十九年吾が邦との雇傭契約満期を機として歸國し、豫ねて先輩バー博士の推薦せしフェニックス橋梁會社の西部代表者に就職して、カンサス市に駐在し、且つ一般の顧問技師として活躍せしも、尙ほ大學教授たりし氣分を失はず、土木技術者の教育に關する論文等をインデニアリングニュース(一八八七年一月號)に發表し、之が斯界の論究的となり、技術者教育に一段の進歩を促ししが、一方また事業家として、セントルイスに於ける市街鐵道、その他重要なる多くの工事の設計並に請負をなし、更に顧問技師としては鐵道會社に關係した



りき。然るにかくの如く會社側と請負側とに職を有することは、種々なる困難の立場を誘起することを經驗し、一八九二年(明治二十五)請負契約數の減じたるを機として、獨立の顧問技師として開業することとなり、從來彼の主任助役技師たりしアイ・デー・ヘッドリックと共同して、合資會社を起し、ワデル・アンド・ヘッドリック會社と稱したり。彼の設計は、技術的には橋梁の型式均整と構造様式に特徴を表示したるを以て有名となり、且つ信用を博して、米國に於ける長大なる橋梁にしてドロブブリヂ及びカンチリバー式の幾多の橋梁の設計監督をなし、またシカゴ市の高架鐵道構築に關與せしが、また是等の工事報告書をアマリカン・ソサイティー・オブ・シビル・インデニア誌等に發表する等、夥多の著書及び橋梁仕様書を著述して、土木技術上の進歩發達に貢獻する處大なるものありき、されば一九〇四年マックギル大學はドクトル・オブ・サイエンスの學位を、またミゾリー州立大學はドクトル・オブ・ローの學位を各々彼に授與せしが、彼は其の他米國及び加奈陀に於ける學會の名譽會員に推薦せられ、國際王學會會議に於ける權威者の一人となれり。

ワデルは、かくの如く米國土木技術界殊に橋梁構築に關し、其の進歩發達の基礎を築ける功勞者なると同時に、常に後輩の教導を念とし、吾が邦土木技術者にして彼の地に彼を訪問せる多數の人々にも懇切なる指導を與へ、吾が邦學界に貢獻する所亦少からざるものあり

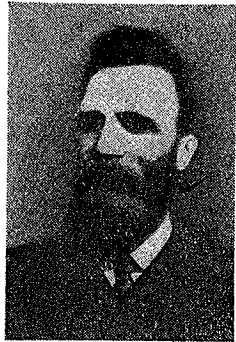
一九二一年(大正十)支那に於いて、黃河鐵橋架設の國際的設計見積の施行せらるゝや、ワデルは、米國を代表して渡支せしが、吾が邦よりも大村卓一、大井上前雄等は、これが計畫見積を携へて出張し、各國當事者間に激烈なる討論行はれたり。このとき、米國案は必須條件に缺くるところありて失格したるも、當時論議に於いては彼は吾が提案に對して、好意的支持を與へたりき。而して票決の結果は、つひに佛國案を以て第一と決定せしが、その佛國案も其の後間もなく惹起せる支那内亂のため、實現に至らずして中止せられたりき。この時彼は歸國に當り、我が國を訪問し、勳二等瑞寶章を拜受せしが、また一九三〇年(昭和五)萬國工學會の東京に開催せらるゝに當り、再び來朝し朝野多數の名士の歡待をうけたるは前述の如し。かくて彼は一九三八(昭和十三)三月三日八十四歳の高齡を以て、逝去したり。

11 ヘンリー・ダイエル (英國人) Henry Dyer

○工學寮都檢、兼土木及機械學教師

ダイエルは明治六年(一八七三)工部省工學校(工部大學校前身)開校に當り、同年六月三日招聘に應じ、部下教師及び助手と共に七月來朝し、工學寮都檢(後教頭)兼土木工學及機

械工學教師に任せられ、月俸六百五十圓を給せられたり。而して翌八月九日彼等が延邊館に於いて餐饌を賜はる光榮に浴したるは、當時彼等の招聘の如何に重要視せられたるかを窺知するに足るべし。當時工學寮創業の際なりしを以て、彼は學科課程は勿論、其の他諸規則の撰定、また校舎の構造、教室の配置等を計畫し、本邦に於ける工學教育上の基礎を定め、能く部下教師を統率して、注意周到其職に盡瘁せり。



ヘンリー・ダイエル奏上文

明治十年一月工學寮は工部大學校となり、翌十一年四月其の開校式を舉げ畏くも 明治天皇の臨御を仰ぎ奉りしが、この時ダイエルは、工部大輔伊藤博文及び大書記官大島圭介について左記の奏文を奏上したり。

外臣ヘンリー・ダイエル・同僚諸子ニ代リ、本日

大駕親臨、本校無上ノ光榮ヲ賜フヲ謝シ、恭シク貴國ノ爲ニ此開校ノ盛典ヲ祝ス、夫レ技術ノ教育ハ實ニ鴻益ノ事業、外臣等已ニ其職ニ任セラレ、今此盛典ニ陪スルヲ得、何ノ恩榮カ之ニ如カン、豈拮据黽勉此校設立ノ目的ヲ達シ、以テ 聖恩ニ報セサランヤ、抑此校創立以來、歳ヲ閱スル僅カニ五年、業已ニ事績ノ盛大ヲ兆ス、亦素志ノ虚シカラ

サルヲ證スヘシ、而シテ設立ノ目的ハ佗ナシ、貴國無限ノ物産ニ因テ公衆ノ便益ヲ起スヘキ工師ヲ教育スルニアリ、望ムラクハ、此事業ヲシテ益盛大ナラシメ、外臣等任滿チ國ニ歸ルノ日、多少ノ成績ヲ貴國ニ留メンコトヲ、即チ工師ヲ養成スル一大學校アリ、廣大ナル土木ノ功アリ、人民ノ進歩ヲ助クル無數ノ機關器具アリ、諸般物品製造ノ技術アリ、加之ナラズ、後來公私ノ工事ヲ管理シ、又後進ノ先導トナリ、貴國歴史ノ體面ヲ一新スル人傑ノ輩出スルアルニ及ンテ、或ハ我輩致ス所ノ功績ナリト言ハルルヲ得ハ、外臣等貴國ノ爲ニ費消セシ時日ノ空シカラザリシヲ覺ヘン、外臣、冀クハ、實祚長ク榮ヘ、功德國ニ洽ク、良民益々昌ヘ、共ニ福祉ヲ享ルアランコトヲ、謹テ奏ス

ダイエルは、吾が邦に於ける工學技藝の進歩發達の基礎を築きたるものにして、在職十年、明治十五年六月一日滿期解任となりしが、歸國に當り勳三章旭日小綬章を賜はり、其の後勳二等瑞寶章を贈られ、ついで明治三十五年六月には、東京帝國大學名譽教師の稱號を與へられ、更に大正四年には吾が邦博士會の推薦によりて、工學博士の學位を受領せり。

抑もダイエル赴任當時に於ける吾が邦の工學教育は、未だ體形を成さず、また歐洲に於ても、單純なる技工の域を脱して、學理に準據せる専門學となりてより、なほ未だ歲月を経ること多からず、之れを綜合したる學校は、唯瑞西國チューリッヒ市にありしのみ、然るに工部

工部省工學寮

省工學寮の組織は、所謂綜合大學の機構にして、土木、機械、電信、造家、實地化學、及び鑄造（後冶金と改稱）鑛山の六學科の専門に別れ、普通豫備教育二個年、専門教育二個年、之れに専門實地教育二個年を加へて、六個年終業の教育方法を採用せるものにして、此の組織を採りたるは全く彼の提言に依るものなりしなり。

ジャーデン・マゼン
館主（横濱英一審）

ダイエル招聘の顛末は、時の工部少輔山尾庸三が、外人教師傭入方を、遣米歐使節岩倉全權一行の副使工部大輔伊藤博文に依頼したるに起れり。而して伊藤大輔は明治五年八月英京倫敦に滞在中、機會を得て隨行員二等書記官林薫（後年外務大臣）をジャーデン・マゼン

ランキン
（グラスゴー）
大學教授

ンの許に遣はし、これに學校創設の事を委嘱したり、マゼンは、即ち伊藤大輔が維新前英國に渡航せし際、其の斡旋の勞をとりたる、當時横濱英一番商館の經營者なき。依りてマゼンは、この委嘱を受くるや、親友ゴルドン教授にこれを相談せしに、同教授は更らに之をグラスゴー大學教授にして、當時工學界の大家たるランキン博士に諮りしかば、同博士は當時僅かに二十四歳の青年學者たりしダイエルを選抜してこれに赴かしめしなり。かくて翌六年ダイエルは部下教師及び助教を率ゐて來朝せり、一行總て九名にして、ダイエル、マール、キング、クラーク、コーレー、エルトン、ダイバース、タレーギー、モンデーなり。

ダイエルは、一八四八年（嘉永元年）八月十六日、蘇蘭土ホスウエルに生れ、長じてグラスゴー大

學に學び、成績優等を以てウットウォルズ受賞學生に擧げられ、名聲籍甚なりしかば、遂にラ
ンキン教授の推舉する處となり、明治六年（一八七三）吾邦に招聘せられ、在任十年、任期満
ちて十五年六月（一八八二）、教頭の位地をダイバー博士に譲りて歸國せり。

ダイエルは歸國後グラスゴーに住み、工業教育及びその振興に盡力し、グラスゴー大學よ
り名譽法學博士の學位を與へられ、また同大學の終身總長及び其の他の大學の總長となり
しが、東洋に關する著書としてはジャパン・グレートブリテン・イン・イースト等あり、常に在
留邦人を扶掖すること渾かりき。大正初年彼が日本再遊の志あるを聞き、グラスゴー會及
び虎之門會は合同を以て大いに歓迎せんと計畫せしが、偶々世界大戰の勃發に遭ひ、彼は國
事多忙のため日本來遊の企を中止し、間もなく一九一八年（大正七）九月病を得て長逝した
り。依りて彼が歓迎の計畫は畫餅に歸せしが、有志相會してダイエル夫人の意志を聽き、歡
迎費及び記念資金を合せて、工科大學に圖書購入資金として寄附し、以て吾が邦工學の開祖
たる彼の偉業を永く後世に傳ふる事となれり。

12 エドワード・ダイバー（英國人） Edward Divers

○工學寮、工部大學校及理科大學教師

ダイバーは明治六年（一八七三）吾が邦工部省工學寮（工部大學校前身）の創設に當り、
俸五百圓、宿料四十圓の支給を受け、十五年（一八八二）七月ダイエル歸國の後、代りて教頭
となりしが、傍ら造幣司東京出張所分析技師及び内務省石油取調委員囑託を兼ねたりき。
而して十九年帝國大學の設けらるゝや、舊工部大學校より理科大學化學教師の職を襲ひ、爾
來職にあること實に二十六年の長きに亙り、其の間職務に恪勤なる、嘗て化學實驗の際過ち
て其の左眼を失するに至りしも、定規の外一日の休暇もなさず、不撓の精神を以て講學と研
究とに従ひ、學生を率ゐて共に化學上の新探究に従事したり。彼の所説は頗る創見に富み、
帝國大學紀要、獎學會報その他海外諸雜誌に掲載發表せられたるもの五十餘篇の多きに達
したり。されば門下生たる吾が邦化學者も、亦彼の影響を受けて有益なる研究の結果を得
たるもの甚だ多く、彼の指導のもとに之を公表し、遠く海外に紹介せられて、吾が邦斯學の
世界的地位を高上せしめたること鮮少ならざりき。かくて彼は明治十九年十一月勳三等旭

日小綬章を拜受し、次で二十二年四月勅任を以て待遇せられ、三十一年七月月俸六百二十五
圓を受け、八月勳二等に陞敘し瑞寶章を贈られ、翌三十二年（一八九九）七月任期満ちて歸國
するに際し、特に拜謁の光榮を賜はりき。この時參内に當り、胸間に勳二等瑞寶章を輝した
る彼が喜悅の有様は、當時門下生に忘るゝ能はざる印象を與へたりと謂ふ。而して同年十

二月には、政府より養老の資として修身年金千八百圓給與の特典を與へられ、また東京帝國大學名譽教師の稱號を授けられしが、後更に同大學構内に胸像を建設せられて、永く其の功績を表彰せられたり。

ダイバーズは一八三七年(天保八)十一月英國に生れ、十五歳の時倫敦市立學校理科教諭ホールに就いて化學を脩め、ついで皇立化學學校に入學し、終業後、同市セントバルソロミュー病院附屬醫學學校助手となり、一八五四年(安政元)愛蘭國ガルウェー市グエンス・コレヂの化學助教授に任せられ、傍ら醫學の研究に勉め、一八六〇年(萬延元)同大學より醫學博士の學位を受け、翌年同國教育委員の下に化學講師の職を奉じ、其の翌年始めて化學論文一篇を著し倫敦化學會より出版したり。其の後職をボルミング・ハム市醫學學校の藥學教授に奉じ、居ること六年、一八七一年(明治四)倫敦市ミドルセックス病院附屬醫學學校に法醫學教師に轉じ、同市化學會委員たりしが、明治六年(一八七三)吾が邦の招聘に應じて來朝し、爾後二十有六年の長きに亙り、其の任を完うして、吾が邦無機化學研究の基礎を築き上げたりしなり。かくて明治三十二年(一八九九)七月歸國し、故山に起臥すること十二年、一九一二年(明治四十五)四月、七十五歳の高齡を以て英國倫敦に長逝したり。

13 **ダブリュ・イー・エルトン** (英國人) W. E. Ayrton

○工學寮、工部大學校物理學教師

エルトンは、明治六年(一八七三)六月ダイエル一行と共に來朝し、工學寮教師に招聘せられたり。當時工學寮は創立の際にして、マイエルの建言により、大學組織となり、エルトンは専門科に於いて電信及び理學を擔當し、月俸六百圓を支給せられたり。當時電氣工學に於いては、電氣の純理を教ふる外、實用としては、電信ありしのみにして、電燈の如きは、未だ電氣を利用して燈火を發生し得る實驗を示したるに過ぎざる、甚だ幼稚なる時代なりき。其の後明治十一年三月二十五日に至り、中央電信局木挽町に新設せられ、其の開業式及び祝宴會を工部大學校に開催せらるゝに當り、會場の燈火用として彼の指導の下に、工部大學校生徒藤岡市助及び中野初子の兩人が、グローブ電池を使用して孤光燈を點じ、來會者を一驚せしめたるは、吾が邦に於いて、電燈を點じ、實用に供したる最初にして、今日電氣協會は此の日を電氣日となし、吾が邦の電氣記念日と定めたり。

明治十年一月十一日、工學寮の工部大學校と改稱せられ、理學部の設置せらるゝや、エルトンは同部の教師として、一般には物體の性質、運動學、動力學、水靜力學、音響學、光學、熱學、磁氣學、摩擦電氣學、流電氣學、重力學を教へ、専門に進んでは動力學、熱動力學、電氣靜力學、電磁氣學、物理光學を授けたり。

吾邦電燈點火の嚆矢

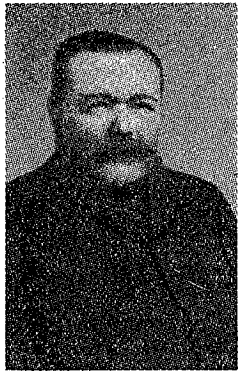
エルトンはペリー及びグレーと共に工部大學校に於ける有數なる學者なりき。當時本大學校は専ら工學専門家養成を目的としたるを以て、物理學の専門科を有せざりき。彼はこれを以て教育上の缺陷となし、物理學の忽緒に附すべからざるを説き、斯學の勉めに盡力したりしが、また一面非常なる勉強家にして、日曜日にも出校して研究に勉め、ペリーと共同して多くの研究の結果を發表し、爲めに當時物理學研究の中心は、英國より日本に移りたりと稱せられし程なりき。

エルトンの講義振は、屢々本道を脱線して、餘話を挿むこと多かりしを以て、其の本來の眞意は直ちに判断しえざるも、漸やくにして其の至言なるを知ること多く、「人の眞似をしてはいけぬ、何事かある時は決して夫を眞似しやうとせず、更らに一層良い物を作る様に、また發見する様心懸けねばならぬ」などは屢々述べられたる所にして、熱心を以て學生の指導薰陶に當りたりき。かくて明治十一年(一八七八)六月二十九日任期滿了せしを以て歸國することとなりしが、なほ研究に没頭するといふ有様にして、其の學問に對する熱意は、當時學界の驚嘆せる所なりき。歸國後に於いて英國理學界の第一人者として推舉せらるゝに至りしも宜なりと謂ふべし。

14 ジョン・ミルン (英國人) John Milne

○工學寮、工部大學校地質、鑛山學教師 (地震研究者)

ミルンは、明治八年(一八七五)八月本邦に招聘せらるゝや、單身陸路シベリヤ、蒙古及び支那を過りて來朝し、翌年三月八日附を以て、工部省工學寮地質學鑛山學教師として雇傭せられたり。當初は三個年の期限にして、一個年英貨八百磅の割合を以て日本銀貨にて月未支給のこと、旅費は來歸航共一等船客を以て待遇する契約なりしが、十二年三月八日契約を更新し、月俸三百五十圓となり、而して三個年經過の後、六ヶ月前に雙方より申出なき時は更らに無期限繼續の效力を有することとなりたり。かくて十九年工部大學校廢止と共に東京帝國大學となるや、理科大學教師として地震學の研究を命ぜられて、月俸四百圓を給せられしが二十一年五月勳四等瑞寶章を拜授し、翌二十二年には五個月の休暇を得て歐米を視察し、二十三年勅任に準じて待遇せらるゝこととれり。當時當局の稟申左の如し。



帝國大學備教師英國人勳四等ジョン・ミルン

月俸銀貨四百圓

右へ、明治九年三月元工部大學へ傭入以來、引繼奉職シ、既二十一年五月五日敍勳ノ榮ヲ與ヘラレ

候次第ニテ、多年勞績顯著ニ有之、加之本務外ノ義ニハ候ヘ共、地震學ノ研究ニ關シテハ殊ニ盡力シ、將來ノ參考ニ供スベキモノ不少候義ニモ有之、旁以テ同人身分ノ義、自今勅任ニ準ジ取扱相成様致度此段及昭會候也

明治二十三年九月五日

式部長 侯爵 鍋島直大

文部大臣 芳川顯正

帝國大學備教師英國人 勳四等 ジョン・ミルン

帝國大學備教師英國人勳四等ジョン、ミルン、自今勅任ニ準ジ御取扱之儀御協議之趣致承知候、右ハ奏聞之上、御裁可相成候條、此段及御答候也。

明治二十三年九月十五日

文部 大臣 殿

式 部 長

而してミルンは明治二十八年（一八九五）六月に至るまで約十有九年餘の久しきに亘り、幾多専門學士を養成して、學問應用の根柢に培ひ、殊に力を地震學の研究に致して、本邦に於ける斯學發達の基礎を築き、或は實驗に必要な諸機械を考案作製し、之れが實地應用上、延ひて鐵道線路並に汽關車に改良を及ぼし、爲めに燃料を減少したるが如き、其の他耐震建築に關する考案（掘込基礎橋臺の構造）を爲し、又書冊の刊行と研究と實驗に巨額の私費を抛つ等、學術上鴻益を謀りしこと夥しかりき。かくて彼は歸國に先ち特に 明治天皇拜謁

の榮を賜はり、尋いで勳三等に陞敘せられ、旭日中綬章拜授の殊遇に浴し、終身年金、壹千圓受領の特典を得て故山に還り、歸國の後も益々學術界に盡瘁せしが、一九〇二年（明治三十五）十一月二十八日東京帝國大學名譽教師の稱號を授與せられたり。

ミルンは一八五〇年（嘉永三）十二月三十日英國リヴァプールに一尺息子として生れたり、父はジョン・ミルン、母はエンマ・トワイクロスといへり。ロッチデールの學校を経て同市コリチエード・カレッジに學び、それより倫敦に出でてキングス・カレッジに入り、また王立礦山學校に學びしが、後ランカシャ其の他に於いて鑛山技師として經驗を積み、獨逸其の他中央歐羅巴の主要鑛山を視察して歸國するや、サー・ジェームス・アングラスン、及びサイラス・フキールド等と共にニューファンドランド及びブラダアに於ける鑛物狀態の調査を依頼せられ、二個年彼の地に滞在し、其の後大西洋岸の一岩石島ファンクアイランドに渡りたり。此の島は現今は既に大西洋の波浪に洗はれ遂に消滅に歸したるも、往時は大海雀の巢窟なりき。彼はこの島に於いて既に世に跡を絶ちし海鳥の多くの骨片を採集せり、斯の如く彼の探究心は已に青年時代に於いて顯はれしが、兩親の許可なきに休暇を利用してアイランドに赴き火山に興味を抱き種々の事柄を覺えて歸來し、學校より賞與せられたりと謂ふ。吾が邦に招聘せらるゝ前年、一八七四年（明治七）には英國王立地學協會及びロスチャ

イルド家の發起にかゝるヒーク博士一行の探險隊に加はり、聖書に有名なるシナイ山の精確なる位置を決定して、斯界の耳目を集めたるは當時有名なる事柄なり、翌年（明治八年二十五歳）吾が邦に向ひ出發するに當り、安易なる海路に依らず、同年八月三日ハル港より先づ諾威のゲツン、バーク港に上陸し、瑞典芬蘭を横斷し、セントピタースバーク（當時露國の首都）に出で、今日のシベリヤ鐵道の通過せる邊土を通り、一時は音信不通となり、蒙古を横斷し、萬里の長城に出で、それより上海に到着して、翌九年二月二十四日漸やく來朝したり。此數ヶ月に亘る長途の旅の如何に苦難なりしかは、彼の報告記事の一節に、「途中の或る地方に於いて、三十一日間は道路と稱すべきものなく、家なく、パンなく、野菜なく、洗面せず、衣服を更へず、晝夜降雪四十度の寒に睡つた」と記し居れるによりしも察するを得べし。

ミルンの地震に留意せし始めは、東京に着せし最初の日にして、其の夜彼の官舎ともいふべき、工部省所有の山口屋敷に於いて地震に襲はれ、家屋の音を立て、動搖するに非常に驚くと共にまた興味を起したりといふ。即ち彼は曾て「朝食に地震、晝食に地震、夕食に地震、睡眠時に地震、是では誰だつて地震に興味を持たない譯にゆかぬではないか」と人に語りしといふ。斯して彼は此の新らしき科學の完成に志し、地震計の創作に苦慮し、百五十に餘る

種々なる機械を考案し、實驗の結果、茲にミルン地震計を完成するに至り、同時に此の新研究に出發するに際し、各方面の人士の協力援助の必要を感じ、明治十三年（一八八〇年）に起りし横濱地方の強震を機會に、多數内外人の賛助を得て、世界最初の地震に關する會合を開催し、遂に日本地震學會を組織せり。かくてミルンは其の名譽幹事長となり、十五年間の長きに亘り、學會の經營、地震の研究調査に勉勵したり。同學會の報告十六卷二十冊は世界地震學者の熟知する所にして、毎卷地震に關する基礎問題の研究を以て埋められ、而も其の報告は殆んど彼の手になりしものにして、政府に於いても此の新科學の價値を認め震災豫防調査會を設け、年々巨額の補助金を下附することとなり、爾後吾が邦の地震研究は浸々として進み、今日の隆盛を見るに至りしなり。

ミルンは暑中休暇には常に、本邦太平洋沿岸の地震帶各地及び諸方の火山調査を行ひ、必ず有益なる報告及び研究の結果を發表し、其の足跡は北は千島より北海道、朝鮮、マニラ、ポルネオ、オーストラリア及び火山島に及び、北海道の如きは屢々來往し、時には専門外に互り、小樽手宮の古代文字に就いて調査し、中にも十一年（一八七八）八月エドワード・エス・モリス教授（大森貝塚發見者）及びトーマス・ライト・ブレキストン（ブレキストンライン發見者）等と函館の貝塚を發掘し、其の調査を發表して、世界に於ける人類學會考古學會に大なる衝動を與へたりしが、

また毎回開拓使及び道廳を訪問し、福士盛豐氏を通じて、北海道開拓に關し種々の意見を陳べたりとす。

斯くして彼は二十八年(一八九五)任期満ちて、吾邦に赫々たる偉業を残し、夫人(函館願乗寺堀川乘經氏長女)と相携へて英國に歸るや、かねて同氏の主張たる「大地震は地球上の如何なる處にても測定し得る」との論を實證せんが爲め、殆んど地震なき英國に於いて、直ちに地震觀測所をアイル・オブ・ワイトのシャイドの丘に住宅と共に建設し、シャイド地震觀測所と稱し、英國科學協會の地震部を自ら擔當し、更らに研究を進めつゝ、各種の學術雜誌にこれを發表したり。而して一八九八年(明治三十一)には「地震學」を著述せり。彼の單行著書は、先きに一八八二年(明治十五)に著はせる「地震」の二冊及び「マイナーズハンドブック」「結晶學」の小著あるに過ぎざれども、學術雜誌に發表せるものに至りては甚だ多く、その研究題目は常に清新に潑刺たるものあり、特にその地震學は學界に於いて全く新地を開拓せるものにして、彼によつて地震は初めて科學の對象として取扱はれ現今の地震學は彼によりて初めてその基礎を形成するに至りしなり。されば英國に於いては「地震ミルン」の異名を以て傳へられ、シャイド地震觀測所は英國に於ける名所の如く、遠近を問はず博士を慕つて來訪するもの多く、英國の皇太子殿下御來訪の光榮に浴し、彼の偉業をし

て更らに光輝あらしめたり。

かくて彼は英國に於いても倫敦王立學士院會員、倫敦キングス、カレッジ名譽會員を以て優遇せられ、オックスフォード大學より博士の學位を授けられ、其の他種々の學會より名譽會員に推薦せられしが、一九一三年(大正二)七月三十一日六十四歳を以てシャイドの自宅に逝去せり。而して地震觀測所は彼の死後其の遺言によりて、全部オックスフォード大學内に移轉せられ、エチ・エチ・ターナー博士監督の下に英國科學協會の手に繼續經營せらるることとなれり。

ミルン夫人は渡英後兎角健康勝れず、彼の逝去後、シャイドの自宅にあつて靜養せしが、世界大戰に遭遇して病軀を以て不自由を忽び、戰爭終結をまち、醫師の勸告により、吾國に歸來することとなり、大正八年(一九一九)十一月到着せしが、宿痾癒えず、同十四年一月函館市湯の川通の自宅に六十七歳を以て長逝せり。かくて翌十五年十一月はミルン逝去後十三年忘に當りしを以て、彼の門下生及び舊知の名士相集まりて、彼及び夫人のため追悼の碑を夫人の生家堀川家塋域に建て、彼の毛髪と夫人の齒骨を收め、師徳を追慕せる記念講演會を開催し、彼の閱歷と功績を印刷に附し、長く其の偉勳を後世に傳へたり。

15 ジョン・ペリー (英國人) John Perry

○工學寮、工部大學校電氣及機械學教師

ペリーは明治八年（一八七五）工學寮教師として招聘せられたる、電氣及び機械工學專家にして、十年工學寮の工部大學校となるや、その教師となれり、當時工部大學校は専ら工學専門家の養成を目的とせしものなりしが、彼はエルトン、グレイ兩教師と共に物理學者の養成に勉め、我が國物理學發達史上貢獻著しきものありき。彼は在職四年明治十二年滿期解職となり、大正四年吾邦博士會の推薦により、工學博士の學位を受領せり。

ペリーは一八五〇年（嘉永三年）二月十四日英國ウルスター市に生れ、クインズ、カレッジ及びベルファスト・ユニヴァーシティーの出身にして同大學の學位を得て、一八七〇年より四個年クリフトン、カレッジの助教授となり、一八七五年（明治八年）吾が邦に招聘せられて來朝し、一八七九年歸國後は、専ら自己經營の電氣事業に従事し、一八八一年よりローヤル、インペリアル各工科大學の教授に歴任せしが、また英國電氣學會々長となり、斯界に貢獻する處大なるものありき、かくて晩年前記兩大學の名譽教授となり、一九二〇年（大正十）逝去せり。

16 トーマス・アレキサンダー（英國人） Thomas Alexander

○工部大學校土木工學教師

アレキサンダーは、明治十二年（一八七九）三月十九日、三箇年の期限を以て工部大學校土木工學教師として來任し、月俸日本銀貨三百五十圓を支給せられたり。當時大學校の課程を顧みるに修業年限は六年、内豫科二年、専門科四年にして、専門科最後の二箇年は、專修一科を實地專攻する規程なり、豫科は一般工學に必要な普通學を教へ、専門科は八分科に別れ、各科は之を本科支科に分ち、土木學科は本科に應用重學、土木學講義、圖學、鐵道計畫等を教へ、支科は數學、理學、機械工學、蒸氣機械學、金石學、地質學、測量學等を教授したり。

アレキサンダーは専門學科の教師として土木、機械、造船、造家科學生に應用力學を、土木科學生には土木工學、土木測量、圖學並びに數學を擔當せり。雇傭契約は更らに繼續せられ、明治十九年七月に至りしが、同年三月帝國大學令發布せられ、工部大學校は東京大學と合併し、帝國大學となるに及び、當局より續いてその職にあることを勸奨せられたるも、彼は在來の大學組織を以て可なりとし、嘗て其の存續を主張し、當局に建言せしことありて轉任を喜ばず、工部大學校の閉鎖と共に歸國したり。解任に當り、大學は其の功績に酬ゆるため貴重なる物品を贈呈し、次いで明治二十一年五月二十四日勳四等瑞寶章拜授の光榮に浴し、大正四年吾が邦博士會の推薦に依り、工學博士の學位を授與せられたり。

アレキサンダーは一八四七年(弘化四)五月二日スコットランドのグラスゴーに生れ、グラスゴー、ノルマル、スグルを経てグラスゴー、ユニバーシティー理學部土木工學科を卒業し、C.E.の學位を得しが、またダブリン、ユニバーシティーを卒業してM.A.I.の學位を受領し、ついで我が政府の招聘により來朝し、在職八個年、一八八六年歸國せしが、やがて母校ダブリン、ユニバーシティー教授として、トリニティー、カレッヂに於いて土木工學講座を擔任し、在職二十五年に際し、盛大なる祝賀會は開催せられ、夥多の記念品の贈呈を受け、其の後職を辭して名譽教授となり、當時英國に於ける有數の碩學者と稱へられしが、一九三三年二月一日八十有五の高齡を以て逝去せり。

17 チャアレス・チックンソン・ウエスト Charles Dickinson West

○工部大學校機械工學教師(後帝國大學造船學教師)

ウエストは、明治十五年(一八八二)六月、吾が邦工部大學校の招聘に應じて來朝し、同年八月十六日機械工學教師として月俸三百五十圓を給せられ、同年倫敦インスティテュション・オブ・メカニカル・エンジニアの會員に擧げられ、同十九年東京大學と工部大學校の合併せられて帝國大學となるや、工部大學に機械工學の教職を襲へり。當時我が造船術は學術及び事業共に幼稚なりしを以て、彼は工部大學校に於いて、造船學科の創設に盡力せしが、ま

た十數年間土木、電氣、造船、造兵、採鑛冶金、應用化學等に共通せる學科教授を擔當したり。殊に彼は機械工學中船用機關學に精通せしを以て、その指導薰育の下に多數の船用機關專攻者の輩出を見、これがやがて帝國海軍の造船造機の進歩發達を促したること少からず、今日世界の稱譽を博するに至りし基礎を築きたりといふも、過言にあらざるべく、更に當時の民營造船所たりし三菱、川崎及び大阪鐵工所等の發展にも寄與する所多大なるものありたり。

彼は學生に對し一意専心その教導提撕に勉め、居常邊幅を修めず、怒を顯はさず、諄々として教へて倦まざる態度は、人をして春風に座するの感あらしめたり。是れ全く彼の高き品性の自ら流露せるものと謂ふべし。

かくて、ウエストは職に在ること二十有六年、其の間一意職務に盡力し、二十七年九月勳四等旭日章を拜受し、翌年十月勅任待遇となり、ついで三十一年四月勳三等瑞寶章を拜受し、月俸は契約更新毎に増額せられ、終に六百七十五圓となり、四十一年漸く満期に近づき老を故山に養はんことを日頃樂み居りしに、同年初頃より二豎の冒す所となり、再び起たず、一月勳二等に陞敘し、瑞寶章を贈られ、且つ手當金五千圓給與の恩命に浴せしが、四十一年(一九〇八)一月十日大學教師館(大學構内)に永眠せり、享年六十一歳なりき。

ウエストは英國ダブリン府のセントバトリック寺院の長老の嫡男として生れ、一八六五年（慶應元）ダブリン・トリニティー大學に入學し、在學中學業常に優秀にして、物理學實驗考查に於て一級優等の第一席を占むること再度に及び、一八六九年（明治二）學位試験の際には物理學實驗に於いて金牌賞を得て高等及第生となりしが、更らに工學校の課程を履修し、卒業試験に於いてまた第一席を占め、卒業證書の外に實驗重學・物理學・化學・探鑛學・地質學の特別證書を受領せり。

かくて彼は大學卒業後、ベルケンヘット製鐵場レアルトブゾルス、シップビルダー・エント・エンヂニール社に入り、三年間見習生として服務し、次いでグレイフス、ラッドのブラウンス社に入り、大に鑄鐵業並に普通工學上の實地經驗を積み、一八七七年（明治十）インスティテューション、オブ・メカニカル、エンヂニール會員ウキリアム・シルバルホールと共にメニートンに於いて機械工學士及び顧問工學士の職務を以て蒸汽機關其他機械の製造に従事せしが、同地の風土氣候彼の健康に適せず、遂に其の業を廢し、一八八二年（明治十五）六月を以て吾が邦工部大學校教師に招聘せられ、爾後二十有六年、吾が邦工學界に偉大なる功績を擧げ、遂に故山に歸るの機を逸し、在職中四十一年（一九〇八）逝去し、青山外人墓地内に葬られたり。後問もなく知人及門下生等、彼の遺徳と功績とを偲び胸像建設の議起り、

東京帝國大學工科大学本館前に於いて明治末年除幕式を舉行せしが、ついで昭和八年二十年忌に際し、門下生其他の有志集りて、盛大なる追悼會を東京に行ひたり。

18 ウキリアム・ケー・バルトン (英國人) William K. Burton

○帝國大學衛生工學教師

バルトンは、明治二十年（一八八七）帝國大學工科大学に衛生工學の講座新設せらるゝに當り、其の教師として招聘せられ、同年五月二十六日來朝し、尋いで内務省衛生局備を兼ね、月俸五百圓に増俸せられ、爾來契約を更新すること二回、其の間九年の長に及び常に學生を指導し、傍ら吾が邦上下水道及び土木工事の企畫經營に盡力し、上下水道普及の基礎を築きたる功績大なるものありたり。然るに二十九年（一八九六）五月二十五日滿期解備となるや、當時内務省衛生局長たりし後藤新平の推薦を受け、その依頼により、進んで瘴癘の地たりし臺灣に渡り、衛生設備の基礎を築きしが、中途病に罹りて三十二年（一八九九）彼の地に於いて逝去したり。是れより先き、彼は大學退職に際し勲四等に叙し旭日小綬章拜授の光榮に浴し、また大學より七寶燒花瓶一對を贈られ多年在任の勞を慰められしが、茲に至り臺灣の官民は彼の功績を後世に表彰し、併せて其の靈を慰めんが爲めに彼の銅像を臺北市に建立したり。

バルトンは一八五五年(安政二)を以て蘇蘭土エヂンバラ府に生れ、父はジョン・ノヒル・バルトンといひ、法學博士の學位を有し、蘇國の歴史編纂官なりき。バルトンは同府に於いて教育をうけ、十八歳の時ブラウン・グロサルス會社(土木及機械技術の業務を經營)の見習生となり、見習期間五個年を経て、後一個年にして拔擢せられ現場主任技師となり、二年後更らに製圖部に轉じ、翌年倫敦府に派遣せられ、當時盛大なりし同社の事業を擔當せり。尋いで一八七九(明治十二)歸社して製圖部に入り、翌年同社を辭職し、倫敦府のインス・エンド・バルトン會社(顧問技師の業務經營)の組合人となり、傍らキングス大學に於いて修學し、其の間大英國衛生會の試験に及第して同會の終身會員となり、一八八一年には倫敦衛生保護會の上席の位置を占めて現場主任技師となり、併せてインス・エンド・バルトン會社の社員として衛生設備に關する同社の業務を擔當せしが、明治二十年(一八八七)日本帝國大學の招聘に應じて來朝したりしなり。

バルトンの我が國に於ける業績は、大學教師として衛生工學を講じ、學生を薰陶すると共に、内務省衛生工事顧問を兼ね、二十一年八月東京市區改正條令公布せらるゝに當り、其の委員となりたり。委員長芳川顯正は、上水を改良し下水を疏導するは市區改正の根本なりと稱し、同年十月上下水道設計調査委員會を組織せしが、彼はその取調主任となり、審議を

重ねたる結果、上水道は同年十二月中に、下水道は翌年七月に至り、設計を完了せしめたり、其の後實施せられたる工事及び設計は共に多少の變更を免れざりしも、この委員會の設計は實に東京市上下水道計畫の基準をなしたるものなりき。ついで二十二年内務大臣山縣有朋は、各府縣に令達して、上下水道改良施設に就き意見を聞かんと欲するものには、其請求に應ずる旨通牒を發したりしが、其の通達に基き、實地調査を依頼するもの廣島、仙臺、名古屋、神戸、大阪、福岡、門司、下關等の諸市に及び、孰れもバルトンの調査設計を煩はしたり。即ち彼は二十五年七月には門司港下水工事調査設計をなし、歸途神戸水道の設計調査を擔當する事となりたり。

此の神戸水道は曩きに二十年神奈川縣備技師英國大佐パーマーが調査設計せし事ありしが、この時パーマーは偶々再び來朝して横濱築港主任技師として在任し、この神戸上水道再調査のことを傳聞し、心平らかならず、その名譽擁護の爲め、最初の設計者たる彼をして設計せしめられん事を、神奈川縣知事内海忠勝(パーマーの神戸水道調査當時の兵庫縣知事)を通して神戸市長に乞ひたるも、バルトンの囑託は既に内務省より許容の通牒に接し、その來着も數日に迫りたるのみならず、上下水道工事は、凡て政府の特別保護の下に施行せられ、内務省の指定に基き、バルトンに委嘱したるものにして、其の間パーマー不信任の事實は毫

も存せざりしを以て、神戸市長はパーマーの抗議に對し陳疏する所あり、パーマーも諒解して事件の落着を見、茲に神戸上水道第一次設計はバルトンの手に成りたるなり。

此の外バルトンの調査せるものに下關市下水道及仙臺市上下水道ありき。前者は明治二十六年五月調査設計をなし、同年十二月より埋立地の一部に實施せられ、後者は同年七月彼が仙臺に赴き、縣技師と共に實地を調査し、同年十一月「仙臺市衛生狀況並改良及水力供給中央局設立案に就て報告」を内務省衛生局長に提出せり。水力工事に關しては、現今の三居澤發電所の計畫に就いて立案せるものにして、後年中島銳治博士の設計の參考となりしものなり。

彼はまた同年十月には名古屋市給水工事の調査を命ぜられ、種々調査を遂げ、翌年六月「名古屋市給水工事に關する意見書」を提出し、ついで二十七年四月廣島市上水道敷設の計畫案を樹てたるが、會々日清戰役起り大霧を同地に進めらるゝに當り、上水道工事急施の必要を生じ、廣島軍用水道の實施を見たり。

バルトンは衛生工學の外に港灣工學にも通曉し、その講義を擔任せしことあり、又各地出張の際京都、新潟、關西鐵道の工事場を視察して施設上の注意をなし、高橋辰次郎は常に彼に隨伴して通譯の勞をとりしを以て、彼の意志はよく現場に徹底したりしと云ふ。

臺灣基隆上下水道

彼は明治二十九年（一八九六）五月滿期解任となりしが、其の後もなほ一個月に亘りて衛生工學の授業を囑託せられ、ついで政府の依頼によりて臺灣に渡り、基隆上下水道を完成し、尙臺北に於ける上水道の源地決定に苦心し、炎暑淫雨を冒して山河を跋渉し、新店溪上流の探險を行へる時、偶々風土病に犯され、療養藥石もその効なく、三十二年（一八九九）八月五日異境に於いて没したり。されども彼の事業と功績とは臺北市に於ける銅像と共に永く後世に顯彰せらるべし。

19 ドクトル・ケレ・ヘーフェー (獨逸人) Dr. K. Hefele

○農科大學林學及砂防工學教師

ヘーフェーの吾が邦に招聘せられたるは、外人教師雇傭時代の末期にして、明治三十四年（一九〇一）一月二十四日より向ふ二年四個月の期限を以て、東京農科大學林學教師として來朝し、月俸五百五十圓と月四十圓の宅料を給せられ、高等官五等以上の奏任官を以て待遇せられ、林學通論及び森林砂防工學を擔當し、傍ら時事問題として森林經濟に關する事項を評論し、本邦各地の森林視察により得たる林業意見を發表し、傍ら之を教材に供して學生の啓發に努めたり。任期短かゝりに拘らず、吾が邦林學教育上裨益する處大なるものありき。彼はまた本邦並に東洋に於ける林業に就き左記の著論を公表して、森林經營上有益

なる參考資料を供したり。

七四

- (一) 山岳の高所に於ける森林經營。(二) 日本に於ける林業試験。(三) 日本に於ける森林旅行の所感
 (四) 樺太東部シベリヤ滿洲支那朝鮮の旅行。(五) 富士山の森林。(六) 日本森林に對する將來の作業
 法。(七) 森林及び理水。

かくて彼は三十六年(一九〇三)六月滿期に先立ちて歸國し、同年十一月在任中の功績により勳五等に敘せられ、旭日章授與の光榮に浴せり。

彼は元來理論に通じたる實地家にして、一八六三年(文久三)三月獨逸バイエルン王國アウグスブルグに生れ、二十才の時アシュツフェブルグ山林學校に入り、二十二歳ミュンヘン大學に學び一八八五年より二個年林區の實習に従事し、ついで官吏登用試験を受け、その間測量事業に従事せり。かくて一八九三年よりプロフェッサールの下に大學森林試験場助手として勤務し、ついでドクトルの學位を受け、一八九六年ミュンヘン大學の講師となり、森林保護學特に砂防工學の講述を擔任し、翌年恩師バウル博士の逝去の後を繼ぎて測樹學の講述を擔當し、在職三年、尋いでシリヒテンブルグ林區の森林官補に擧用せられしが、明治三十四年(一九〇一)一月在官のまゝ吾邦に招聘されて東京帝國大學教師に任せられ、居ること二年有半、本邦林學及び砂防工學に畫瘁したり。

20 アメリゴ・ホーフマン (奥太利人) Amerigo Hofmann

○農科大學林學及砂防工學教師

ホーフマンは農科大學教師ヘーフェラーの後任として、明治三十七年(一九〇四)五月七日東京帝國大學農科大學教師として招聘せられ、月俸五百五十圓及び宿料月額四十圓(同四年三月七十圓に改正)を支給せられ、高等官五等以上の待遇を受け、同四十二年六月滿期となりて歸國せり。彼の擔當講義は森林治水及び砂防工學にして、また其實習を擔任したり。在職五年、熱

意を以て學生を指導し、創設以來日なほ淺き該學課の完備を計ると共に、力を研究材料の蒐集に致し、之が研究の結果は各種の雜誌に掲載し、常に講學の餘暇を利用して研究視察旅行をなし、其の日數は五年間を通じて三百二十日の多きを數へ、我が國全土を踏破したるのみならず、足跡遠く朝鮮臺灣に及び、森林治水及び砂防工學に於いて吾が邦の爲めに貢獻したる功績甚だ大なるものありき。左記の有益なる論文は、行旅匆忙の中より收め得たる成果にして、斯學に忠にして寸陰なほ且つ苟もせざる、篤學者たりし風貌の一斑を窺ふに足るべきものなり。

(一) 日本に於ける旅行見聞記。(二) 日本森林樹種を歐米に移植する問題に就いて。(三) 韓國に於ける森林産物に就て。(四) 日本の河川及び礫流。(五) 砂礫流下の點より爲したる日本河川の分流。

(六)蓄水溝に就いて。(七)日本山腹修築工事に就いて。(八)日本森林の材木。(九)日本に於ける森林所有及施業状態。(十)日本に於ける森林利用及び木材商業。(十一)日本に於ける林政及森林法律に就いて。

ホーフマンは一八七五年(明治八)二月奥大利國ストリースト市に生れ、十八歳の時中學校を卒へ、尋いでウインナ高等農林學校に入學し、一八九七年卒業後、直ちに奥國政府の森林官に擧げられ、ヒルラッハ砂防工事附屬森林技術部に入り、工事の設計並に實行監督に従事し、ついでツアラに轉任し、一九〇〇年森林監督官及び砂防工事指揮官に任ぜられ、明治三十七年(一九〇四)我が帝國大學に招聘せらるゝに當り、同年三月十八日休職となり、五月吾國に來朝し、爾後約五個年、吾が國森林治水及び砂防工事のために盡瘁し、四十二年(一九〇九)任滿ちて歸國せしが、翌年四月在任中の功績により勳四等旭日章授の光榮に浴せり。

21 ウイリアム・エッチ・バー (米國人) William Habert Burr

○米國橋梁學大家(吾邦技術者指導)

バーは昭和四年四月來朝に際し、勳二等瑞寶章拜授の光榮に浴し、盛なる歡迎を受けたり。當時東大土木工學科教室主任より同工學部長宛の上申書左の如し。

勳二等瑞寶章 ウイリアム・ハーバート・バー

右者、添付セル略歴及著書ニヨリテ明ナル如ク、土木工學ノ世界的權威ニシテ、斯界各方面ニ貢獻セル功績ノ偉大ナルコト、米國ニ於テハ固ヨリ、世界ニ於テモ類例尠シ、加之、常ニ我邦ニ厚意ヲ示シ、留學生其他研究調査ノ爲渡米スル者ニ對シテハ、特ニ多大ノ便宜ヲ供シ、自ラ進ンデ指導教育ノ任ニ當リ、薰陶至ラザル所ナキノミナラズ、慈愛懇切肉身モ及バザルモノアリ、就中左記諸氏ノ如キハ、同氏ニヨリテ研學上便宜ヲ得タルコト極メテ太ナリ、米人中有力ナル社會的地位ヲ有シ親日ニ心ヲ効スコト斯クノ如キハ稀ニ見ル處ナリ、從テ氏ニヨリ米國人士ヲシテ日本ヲ諒解セシメタルコトモ亦多大ナリ、敍上ノ如ク我國土木工學各方面ノ氏ニ負フ處少ナカラザルヲ以テ、同氏ノ來邦ヲ促シ、我邦土木工學ノ實際ニツキ、親シク批評指導ヲ乞ヒ、且關係學會官私大學等ニ於テ講演ヲ乞フハ、頗ル有益ナリト認メ、同氏ノ來遊ヲ希望スル所ナリシニ、今回八十歳ノ老齡ニモ係ラズ、快諾セラレ、四月中旬來朝スルコトニ決スルニ至レリ、依テ此機ニ於テ、同氏多年ノ功績ニ報ユル爲、頭書ノ通り敍勳ノ御詮義相成様、此段上申候也。

追テ鐵道省ヨリモ同様敍勳奏請ノ發議有之候、

バーは一八五一年(嘉永四)七月十四日米國コネチカット洲ウオタータウンに生れ、父を

ジョージ・ウイリアム・バート、母をマリオン・フートと云ひ、一八七二年レンスレア工科大学を卒業し、一八七六年より八四年まで同工科大学教授として應用力學を擔當し、一八八四年より九一年までフェニックス橋梁會社主任技師補佐となりしが、やがて同社總支配人に昇格し、尋いでハーバート大學教授(工學部)、コロンビア大學教授(土木工學部)に歷任し、一九一六年以後同大學名譽教授に推舉せられ、また紐育市土木技師及び同顧問技師となり、一八八三年以來紐育土木工事に關係し、來朝當時は同州橋梁部及び水道局顧問技師なりき。彼はまた屢々重要なる技術會議の委員に選ばれ、一九〇〇年にはワシントン・ポトマックに於ける記念橋梁の國際懸賞設計一等賞を授けられ、幾多の學會其の他の會員に推舉せられしが、著書もまた多く、雜誌等には屢有益なる研究事項を寄稿し、學界に貢獻する處頗る大なるものありき。